

ハイスクールクライシ  
スD x D！～遺物使いの  
竜契約者の軌跡

カオスサイン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある町に散らばったとされる遺物（ロストプレシヤス）を回収する為の任に就いた高ランクの遺物使いで竜契約者の少年。

彼は世界の裏で暗躍する人外と出会い何を思うのであろうか？

# 目次

プロローグ&キャラ設定集

プロローグ

1

遺物使いと旧校舎のディアボロス編

EP I 「遺物使いと人外達の邂逅

P

ART I

EP II 「遺物使いと人外達の邂逅

P

ART II

EP III 「遺物使いと人外達の邂逅

P

ART III

EP IV 「遺物使いとはぐれ悪魔

17

23

EP V 「遺物使いと聖女と悪魔払い

30

EP VI 「遺物使いと堕ちた天使の陰謀

PART I

39

EP VII 「遺物使いと堕ちた天使の陰謀

PART II

43

EP VIII 「遺物使いと堕ちた天使の陰謀

PART III

58

EP IX 「事後処理と新たな波乱」

65

遺物使いと月光校庭のエクスカリバー編

EP X 「遺物使いと奪われし者達の想

いPART I

76

EP XI 「遺物使いと奪われし者達の

想いPARTII」—— 86

EPXII 「遺物使いと皇女の怒りと祈り、街の崩壊を防げ！PARTI」

91

EPXIII 「遺物使いと皇女の怒り、街の崩壊を防げ！PARTII」—— 99

EPXIV 「遺物使いと皇女の怒り、街の崩壊を防げ！PARTIII」—— 107

遺物使いの赤龍帝と平行校舎のフェニックス編

EPXV 「遺物使いの赤龍帝と紡がれし平行世界 絆を結んでフェニックスを打倒せよ！PARTI」—— 116

EPXVI 「遺物使いの赤龍帝と紡がれ

し平行世界、絆を結んでフェニックスを打倒せよ！PARTII」—— 121

EPXVII 「遺物使いの赤龍帝と紡がれ

し平行世界、絆を繋げてフェニックスを打倒せよ！PARTIII」—— 125

遺物使いと三勢会谈編

EPXIII 「三勢+ $\alpha$ 会谈にてPART

I」—— 137

EPXIV 「三勢+ $\alpha$ 会谈にてPART

II」—— 141

## プロローグ&amp;キャラ設定集

## プロローグ

Side?

「は?」

「ですから神那戯くん、君に是非共なんですが駒王町という町に散らばっていると思われる遺物（ロストプレシヤス）の回収に赴いて欲しいのですよ」

俺は神那戯 蒼真（かみなぎ そうま）。至って普通…だとは言いがたい高校二年生だ。俺はとある事情によってある組織に二年半前からスカウト、半ば強引に加入させられて以来そこで色々と厄介事に巻き込まれるようになった。

本日も学校が一学期の終業式を終えた直後にこの「世界遺物保護協会」（ソサエティ）に一研究員として、戸倉さん（下の名前は未だに分らないし本人も口にする事が無い）に呼び出されてそんな事を言われた。

「待って下さい戸倉さん?…只ロストプレシヤスの回収をするだけなら他の人にも十分可能な任務ですよね…何故それを俺に?…」

「…」

理由を聞くと戸倉さんは暗い表情をしたのでなんとなく察した。

「ええ、神那戯くんの仰る通り先日、組織の人間を件の町へと派遣しました。

それも数人の遺物使い（ブレイカー）の人達と一緒に…ですが彼等からの連絡が数日前から途絶えてしまったのですよ…」

「はあっ!?!」

予想の範疇を超えた返答が返って来て俺は頭を抱えた。

研究員の一人や二人ならば回収したロストプレシヤスの力に目が眩んで持ち逃げし行方不明になる事は早々珍しくない。

だが今回はどうだ？

ブレイカーの人間の監視があつて尚もそういった行動に走るのは少ない。

真逆ブレイカーまでもがソサエティを裏切つた?…それとも別の何かに全員がやられてしまったのか?…そうだとしてみこういった護衛に就くのは大体がREVEL III  
〜V以上のブレイカーだ。

同じブレイカーもしくははある存在でもなければ太刀打ちする事は容易ではない。

暴走に走つたブレイカーはあの事件以来出たという話は聞いていないが…。

「異常だなそりゃ…」

「ですから神那戯くんに声をかけさせて貰つたのですよ」

もし派遣された者達が何者かの襲撃を受けそれに彼等の所持していた物や回収していたであろうロストプレシヤスが奪われたというのならそれは非常に不味い：ロストプレシヤスだけでも厄介極まりないの代物が多いのにもしもその中に呪いが掛けられた呪念物（カードズプレシヤス）があつて下手に使われてしまったら周りへの被害は尋常なものではすまなくなってしまう。

だからこそ事態を重く見たソサエティ上層部から指折り数える程しかいないといわれている高ランクのブレイカーであり、数少ないある存在との契約者となっている俺に白羽の矢が立ってきた訳か。

「仕方無いですね…：そんな話を聞かされては断る訳にはいきません。

受けましょう！」

「そうですか！そう言ってくれると思つて君達の諸々の手続きは既に完了させておきましたのでね！」

「早いよおい!?!…！」

戸倉さんの手際の良さには呆れるしかない。

しばらくグッバイ俺のMy学友達諸君達よ…。

# 遺物使いと旧校舎のディアボロス編

## EPI「遺物使いと人外達の邂逅 PART I」

S i d e 蒼真

戸倉さんの依頼を受け駒王町入りした俺達。

それからこの町にある駒王学園が二学期に入るまで俺達の前にこの町に入っていた筈の研究員達の足取りやロストプレシヤス調査をしていたが全くといっていい程その足取りは掴めなかった。

そして学校が始まり学園に編入を果たしてから数週間が経っていた。

「コラー！待ちなさあああい！」

「待てと言われて待つもんかあー！」

「またお前等か…」

「げげえ！この間編入してきた神那戯先輩!？」

「ほらとつとと指導室で絞られて来いやあ！」

「「そんな殺生なああああ!?!…」」

「ありがとう先輩！」



女生徒に不貞を働く馬鹿三人組を縛り指導室送りにする日々を送っていた。

とうかこの学園に以前の学友の一人であった相川 真人以上の変態が三人もいるとは思わなかったぞ…。

放課後

「本当によかったのか？ レンカもトワナも何か部活入らなくてさ？」

必要な時は呼ぶし大丈夫だぞ？」

「ソウマはアタシがいないとダメダメでしょ？」

「興味あるのまだ見つかからないから…」

俺の言葉にそう返す二人の紫ツインテールの美少女であるレンカとトワナ。

表向きでは俺の義妹として学園に通わせているが彼女達は普通の人間ではない。

「そういえば私達と同じ匂いがした…」

トワナがそう言ってくる。

「は？ 俺も注意深く見ていたが全然気が付かなかったぞ？…」

「ああ、アタシ達と同じ様な気配はしたんだけどね…微弱過ぎてよくは分からなかったわね…」

「ふむ…」

俺が聞いてみるとレンカも同じような事を感じ取っていたようだ。

以前夏休みのほんの一、二ヶ月前に起きた事件の件もある。

その事件の裏に存在していたソサエティの崩壊を目論んだある男の策略によって都合の良い様に扱われ人生を狂わされてしまった少女の事を俺は思い出していた。

もしかしたらそれと同様の事象が引き起こされているかもしれないのだ。

これは早急に調査の優先する必要性があるな。

「それでその気配を感じたのって一体誰だ?」

「えっと…ソウマがお昼に捕まえてた茶髪の男の子からだったかな?…」

「は?…」

トワナから聞いた言葉に俺は頭を抱えた。

なんでよりによってあの変態なんだよ!?

で後日、件の人物である兵藤一誠の身辺調査をしたのだが何処にもあの事件と同様の物に繋がるような可笑しな所は全く見当たらず至って普通の家庭であった。

そして衝撃の事件が起こる。

件の彼に突然彼女が出来たらしいのだ。

だが俺は訝しんだ。

それハ二トラじゃね?…もしかしたら彼の何かに気付いた他の何者かに命を狙われている可能性があるのではないかと。

だから俺はこつそりと彼等のデートを尾行する事にした。  
そこで事件は起こる。

「ねえ…死んでくれないかな？」

「え？…」

ほら、言わんこつちやない。

兵藤のデート相手は人気のない公園に着くと其れ迄の清楚な態度を崩し突如ボンテージの様な装いになり翼を広げ空へと舞い上がり兵藤を見下ろしながらそう言っていた。

ドラゴンとは違うな…まるで御伽話の天使の様な翼だ…黒いという事はもしかや…。

ええい！考えている暇はないか。

「逃げる兵藤！」

「え？…神那戯先輩!?!…」

「なんで他の人間が此処に!?!…み、見られたからには!?!…」

「むっ！」

謎の美女は俺の存在に気付き襲ってくる。

あくまで防衛するだけで良い。

ここはランクBクラスのロストプレシヤスを使うか！

「水鉄扇」!

「何! 神器がもう一つ!?!…きやあ!?!」

神器? なんだそりや…新たな疑問が出てきたが俺は水色の扇型であるロストプレシヤスを振るい何処からともなく水流を起こして謎の美女に向けて放つ。

「人間なのに手強い…けれどこれならどう?!」

「むっ!」

美女は光を纏った槍を何処からともなく形成し投擲してくる。

あんな芸当が出来るロストプレシヤスなんてあつたか?

思考を他所に俺は再度水鉄扇を振るい防ぐ。

だが…

「かはっ!?!…」

「しまった!?!…」

「ごめんね…恨むなら神を恨んで頂戴…」

水流を展開していない隙間を狙って兵藤に投擲された槍が彼に突き刺さってしまい血を吐きながら兵藤は倒れた。

ただどその惨状を引き起こした美女本人が何処か悲しそうな顔をしながら去っていったな…。

それよりも今は兵藤の状態だ。

どうやら心臓スレスレまで槍が刺さり適切な処置を施さねば命が危ないようだ。

俺は急いでスマホを取り出しある人に連絡を入れた。

『はい？なんだ君か、一体何用だね？』

「長話している余裕は無いんだ！今から言う所に医療班を手配して大至急かつ飛んで来てくれ！お前なら可能だろ?!」

『：分かった、だが代価は高く付くぞ？』

「分かっている！後で俺の体でもなんでも調べさせてやらあ！」

『よっしゃ！』

最悪の事態を鑑みて普段ならば近くに居るのすら嫌なんだが彼女以上の腕を持つ者はいないと思ひ呼んだ。

ついでに兵藤自身の体の秘密そのものも調べて貰う必要性もあったからな。

これで何か分かれば良いのだが：

通話を切った俺は兵藤を抱え、指定したポイントまで急いだのだった。

その直後、

「墮天使の気配を感じて来たんだけどこれは…」

「部長！財布が落ちていましたわ…」

「この子はうちの学園の生徒ね…それにしても墮天使に襲われたようだけど誰かが気が付いて襲われたその子を病院に連れて行ってくれたみたいね…」

これが予想外の事件の始まりだった。

## E P II 「遺物使いと人外達の邂逅 PART II」

Side蒼真

「それで…彼の状態は一体どうなんだ？ビアンカ」

「無論、傷は塞いだよ。けれどもこれは…」

兵藤を発着したヘリに乗せ救命させた数日後、チャイナ服の上に白衣を着崩したこの女性は戸倉さんと同じ研究部門のソサエティイタリア支部の人間であるビアンカ・A（アレックスアンドラ）・ルーが俺を呼びに家にやってくる。

レベルⅣのブレイカーでもあるらしいのだが彼女自身が戦闘をした所は未だに見た事は無い。

ビアンカに俺は問うと彼女はとても難しい顔をしていた。

「口で話すよりも見てもらった方が早いかな」

「ふむ成程な…確かにこれは…」

ビアンカが差し出してきた兵藤のカルテであろう資料に俺も目を通してみる。

医療の知識には乏しい俺でも分かった…兵藤の体の一部機能の数値が異常に高い事が窺えた。

「新陳代謝の数値といい普通の高校生とは明らかに掛け離れている。

例外でいえばボクや君の様なブレイカーだが…今回の様なケースは初めてだ…彼は至って普通の高校生だったのだろうか？」

「ああ、だがレンカ達が兵藤とすれ違った時に微かにだが自分達と同じ様な気配を一瞬感じたと言っていた」

「何だつて!?!それは本当かい!?!」

俺がそうレンカ達から聞いていた事をピアンカに話すと彼女も驚いた顔をしていた。

「唯、彼の経歴を戸倉さんに調査してもらったんだがどうもそれに繋がるような事柄にはあたらなかったんだ…ピアンカお前は神器なんて物聞いた事はあるか？」

「今の今迄聞いた事が無いね…真逆とは思うけど…」

「ああ、兵藤を襲った黒い羽根の美女が言ってたんだ。

確かに神器だと…俺の水鉄扇もその神器と誤解してたみたいだが…もしかしたらあの町に入っていたソサエティの研究員や中級レベルのブレイカーが消息不明になっている件にも繋がると思うんだ」

「ボクらの理解、常識の範疇を超えている事象が起きているという事だね？」

俺の考えに察しの良いピアンカはそう結論を出してくる。

「ああ、事態が俺達の理解の範疇を超えている今、最低でもソサエティの上層部連中の耳



には入れさせない方が得策かもしれない。信用出来ないからな」

「分かった…ボクも極力秘匿には協力するのでしょうか」

ビアンカとそう取り決めた数時間後、兵藤が回復し目を覚ましたとの報を受けたので俺達は病室に足を運んだ。

「うーん…此処は…」

「よう兵藤、気分はどうだ？」

「神那戯先輩…確か俺は…」

「黒い羽根を持った美女に襲われて数日寝ていたんだよ」

「そうですか…はあ…」

目覚めた兵藤は今の自分が置かれている状況を理解し項垂れていた。

「俺、これからどうなるんスカね?…」

「それについてだが…レンカ、トワナ!今ならば感じるか?」

「感じるわ。やっぱり微弱だけど」

「うん…なんだかローズちゃんと似た感じの力を感じる!…」

レンカ達はそう言う。

ほう?如月の所に居る少女と同じ様な感じとは…。

「うお!?レンカちゃんにトワナちゃん!?えつと…」

レンカ達に顔を近付けられた慌てる素振りをして兵藤が彼女達の胸をガン見してるのは後でシバくとして…俺は兵藤のこれからの事について話し合おうとピアノカを呼んだ。

「うお?! 誰っすかこのチャイナ美人は?!」

「話が進騒ぐなよ? 話が進まない」

「す、すいません…」

「それで俺達の事だが…」

兵藤がいくら変態でも別ベクトルで変態なコイツだけはやめておけ? と心の中で忠告しながら俺達の素性を彼に話した。

「神那戯先輩とそのチャイナ美人さんが世界機構の人間! それにレンカちゃん達が実は伝説のドラゴンだって!?!」

「ああ…」

それと兵藤、お前の中にレンカ達と同じ様なドラゴンの力が眠っている可能性があるんだ!」

「俺にドラゴンの力がですか!?!…でもどうやってそのドラゴンを目覚めさせれば?」

「それについては恐らく君自身の【心の力】に反応する高ランクロストプレシヤスに該当するものなのだろう。」

イメージしてみたまえ君が思い描くドラゴンの力を」

兵藤の疑問にビアンカがそう予想を立てて提案する。

「それなら……ドラゴン破！」

ビアンカの提案を受け入れた兵藤は某七つの玉を巡って戦う漫画の技ポーズを決めた。

「な、なんじゃこりゃあああー!?!」

「おおう……」

すると兵藤の右手が紅い竜の腕を模した様で中央部に深緑の宝玉が嵌め込まれた筈に変化したのだ。

「ほう……今迄ドラゴンの鱗や牙などの一部は目にした事はあったけれど腕丸ごとはあまり見た事が無い！是非共調べさせてくれ！」

「後にしろ！」

「あでっ!?!……」

「ほんとに微弱過ぎるな……これでは調べようがない」

「え、えつと……どうすれば良いのですか？」

兵藤の箆手を見て暴走するビアンカを一旦鉄拳で黙らせ俺は集中する。

確かに俺にもドラゴンの気配は感じた。

だが兵藤自身が弱過ぎるせいかすぐに感じなくなつた。

ならば答えは一つだ！

「兵藤、お前ブレイカーになつてみる気はないか？」

「え？…」

俺は兵藤にブレイカーへの道を提案した。

彼ならいざ俺達と並ぶ高レベルのブレイカーになれると確信したからだ。

「…じゃ、じゃあそうさせて下さい！

どつちにしろこのままじゃ家に帰れないし…財布も落としちゃつて…」

「おい待てそれを早く言えよ…」

兵藤は少し考えそう決意を告げると同時に身銭が無い事を言ってきたので早急に探しにいったが既に拾われたようではなかった。

兵藤、明日が休日によかつたな…財布の事はおいといて明日一日でブレイカーの基礎を叩き込んでやるとしよう。

## E P Ⅲ 「遺物使いと人外達の邂逅 PARTⅢ」

Side 蒼真

兵藤を保護した翌日、俺はブレイカーになる事を決意した兵藤にブレイカーの基礎を叩き込んでいた。

まずは兵藤が発現させた籠手以外に何か得物があつた方が良いと俺が所持し持て余していたロストプレシヤスのいくつかを並べて兵藤が今のレベルで扱えそうな物を選別する。

ちなみにビアンカが計測したら現在の兵藤のブレイカーレベルはⅢだそうだ。

「ん？…コレは…」

兵藤は気になるロストプレシヤスを手に取る。

それは

「出した俺が言うのもなんだけどそれ未だに用途不明なコイン型ケースだぞ？」

「でもそれにしては何か違和感を感じるんすよねえ…」

「ふむ…」

兵藤が手に取ったのはコイン型ケースのランクCクラスのロストプレシヤスだった。

何か違和感を感じたと言ったがもしかしたらロストプレシヤス自身が兵藤を所有者として選んだ「選別する遺物へチヨイスプレシヤス」の可能性が高いな。

だが用途不明のままの代物だけでは流石にいけないので持たせてはにおいて別の物を選別させる。

「コレなんかどうだろう?」

「ソレか」

兵藤が次に手に取ったのはかの有名なロピンフッド：に憧れたアマチュアなどつかのチンピラが作ったりリボルバー式拳銃とボウガンを融合させた弓銃型ロストプレシヤス「リボルビングアローボウ」だった。

使い勝手はあまりよろしくないなのでこれもランクはC相当だが今の兵藤にはうってつけの得物かもしれない。

あの竜の籠手へと装着併用すれば使い勝手も改善されるだろうしな。

決まったようだな：じやあ模擬戦という名の試験としゃれこもうか!

「試験は至って簡単だ。

俺の作り出した水壁を最低一つ突破してみせろ!」

「は、はい!」

かくして兵藤の覚醒を促す為のトレーニングが開始された。

「籠手で突き破ってみせらあ！」

「奇抜な判断だ……しかし甘いぞ！敵が防御の手を緩めると思うな！」

「うわっ!?!……」

俺が水鉄扇で作り出した水の壁を兵藤はまずは籠手を権限させて殴りつけようとする。

「大丈夫だ、威力は抑えてるから精々ズブ濡れになるだけだ」

「ぶわっぶ!?!……だったら……!」

「良い判断力だ……しかし……!」

俺の追撃を受けてズブ濡れになりながらも唯殴るだけでは突破出来ないと見た兵藤はリボルビングボウを装備し撃つ。

だが水の壁は少しの水飛沫を上げるだけで崩れる事は無かった。

「クソ……だったらこれならどうだあああ!」

今度は八連射の弾丸を撃ち込む。

だが結局水飛沫を上げるだけで崩れ去る事はない。

「もうリタイアか？」

「いえ……そうか！これなら……」

「む?……」

兵藤は踏ん張り何かを箆手から感じたのか再び腕を構えた。

一体何をやる気なんだ？

「コレが今の俺の持てる最大の一撃だああああ！」

【BOOST!】

「ほう!?…」

箆手から聞こえてきた音声と共に途端に兵藤自身の力が上昇したのを感じた。

兵藤は回り込んでその一撃を繰り返した。

それと同時に弾丸も発射していたのか三つあった水壁が跡形も無く崩れ去ったのだ。

これは予想だにしていなかったな…。

「…合格だ」

「は、はい！よろしくお願います！」

かくして兵藤は協会に登録されていないブレイカーとしての道を歩む事になったのだった。

翌日

「先輩実は…」

「ん?…成程分かった」

休み時間に学業に復帰した兵藤が落としていた財布の行方について俺のクラスを訪



ねて来た。

「どうやら拾った人の代理人である生徒を介して何故か旧校舎に呼び出しを受けたそうで俺について来て来て欲しいと頼んできたのだ。」

「先方への許可は取っているらしいが一体……」

「俺も気になるので二つ返事で了承し旧校舎へと向かった。」

「兵藤一誠です。付き添いの人と一緒に来ました」

「入りなさい」

「む？……」

「兵藤が「オカルト研究部」と書かれた部屋のドアをノックすると奥から聞き覚えのある女性の声でしたので入室した。」

「兵藤一誠君、それに彼の命を救って下さった二年の神那戲蒼真君ね？」

「は、はい！リアス・グレモリー先輩！」

「ああ、やたら騒がれてた先輩方か」

「そうよ。あ、財布はお返ししておくわ」

「それにしてもグレモリー……どっかで聞き覚えがあるな……真逆な……」

「唐突だけどよろしくね。」

「悪魔として」

「る!？」

予想の中か…!

グレモリー先輩は先日の美女とは違う禍々しきさを持った翼を広げて見せながらそう  
言ってきたのだった。

## EPV 「遺物使いとはぐれ悪魔」

Side 蒼真

学園の先輩から呼び出しを受けた兵藤と一緒に俺も訪れた場所に居た存在が自分は悪魔だと名乗った。

ふと周囲を見ると部下なのであろう生徒達も自己紹介とばかりに黒い羽根を広げていた。

「真逆悪魔なんて存在が現実存在していたとはな…」

一般人とは掛け離れている俺が言うのもただけど。

「兵藤君、貴方があの墮天使の女に命を狙われたのは貴方の中に宿った神器が危険視されたからなの」

「コレの事ですか？」

グレモリー先輩から兵藤が命を狙われた理由を告げると兵藤は竜の籠手を出現させる。

「その神器は！…成程ね…」

「コレ一体どんな代物なんですか？」

「ごめんなさい、今はまだ確証がないの…それよりも…」

兵藤の籠手を目にして驚いた顔をし思案する先輩だったがそう言うとは今度は俺に視線を向けてくる。

「神那戯君、一体貴方は何者なのかしら？」

案の定多少の警戒はされているようだ。

「その前に先輩は遺物という物を聞いた事はないですか？」

「遺物？神器ではなくて？」

「…」

先輩の反応を見る限りロストプレシヤスと先輩が言う神器の定義はそもそも全くの別物である可能性が高くなってきた。

「そうですか分かりました。」

俺は世界遺物保護協会に属するブレイカーの一人です。

この町に存在しているであろうロストプレシヤスを回収する為にやってきました」

「！…」

「裕斗先輩、多分字が違うと思います…」

一瞬金髪のイケメン野郎が何か不穏な反応を見せたが白髪のロリ少女、トワナが気が合う友達だと言っていた塔篠 子猫が嗜んでいた。

「聞いた事無い組織ね…それはそうと兵藤君、是非転生悪魔となって私の眷属になってみる気は無いかしら？」

「え？…」

グレモリー先輩は懐から取り出してきたチェスの駒のような物を見せてきながら兵藤にそう言ってくる。

転生悪魔ねえ…それに対し俺は言う。

「先輩には悪いが兵藤の身柄は此方で保護しているんだ。」

まだ信用するに値しない貴方方に彼を引き渡す理由は無いです。

恐らくうちの研究員達は今迄存在を知らなかった人外に襲われた可能性が高い。

それもあつて彼女達への不信感拭えない。

「で、でも兵藤君の意思は？…」

「すいませんグレモリー先輩、今の俺に人間である身を捨てる気は無いです…」

「そ、そう…無理強いは良くないわよね…」

それでも食い下がるグレモリー先輩だったが兵藤の一言で大人しく引き下がった。

「ですが一時の協力関係は結ぼうと思いません。」

少しでも情報が欲しいので

「そう、ならそういう事でお願するわ」

かくして俺は悪魔との協力関係を結ぶ事にしたのだった。

「部長、大公からはぐれ悪魔の討伐依頼が来ましたわ」

「そう、分かったわ」

「はぐれ悪魔？」

黒髪ポニテの確か：姫島朱乃先輩だったか？がグレモリー先輩にそう告げてくる。

「力に飲まれて主を裏切り欲望の赴くままに殺戮を行っている元眷属悪魔の事よ。」

「丁度良いわね。貴方達、見学してみない？」

「は、はあ…」

「それじゃあ是非共見せてもらおうじゃないか悪魔の実力というものを」

「決まりね」

グレモリーの提案を受けた俺達は町の隅にあつた廃屋へとやって来た。

「さあ、さっさと出てきたらどうなの？はぐれ悪魔バイサー！グレモリーの名におういで消し飛ばしてあげるわ！」

「んー？」

「うわっ!？」

廃屋から出てきたのは女郎蜘蛛の様な化物だった。

成程あれがはぐれ悪魔か。

「小娘如きが！その赤毛の様に真っ赤に染めてやるわあー！」

「裕斗！」

「はい！」

襲いかかってくるはぐれ悪魔だがグレモリー先輩の合図で金髪イケメンがとてつもない尋常じゃなく素早いスピードで斬りかかる。

早いが目で捉え切れない程ではないな。

「ぐえええ!!」

「子猫！」

「えい」

「ぎゃあ嗚呼!」

搭篠さんが腕を思いつ切りに振り上げてはぐれに叩き付ける。

「朱乃！」

「うふふー〜！」

「うげええええ!!」

次に姫島先輩が高笑いをしながら手から電撃をはぐれに放った。

「止めよ！」

「小娘め！油断したな！」

「しまっ!?!…」

最後の止メを刺そうとしたグレモリー先輩だったがはぐれは隙を突いて両腕を伸ばして攻撃してこようとしていた。

「水鉄扇!」

「【BOOST!】ドラゴンショットアロー!」

「ぎゃあああ!?!私の腕があああ!?!」

俺と兵藤はすぐさま得物を振るいグレモリー先輩に伸ばされた腕を鋭い水流とエネルギー矢で断つ。

「電撃を受けていたのが運の尽きだったな!おかげで普段より威力が上がったぜ!」

「グレモリー先輩今です!」

「分かったわ!消し飛びなさい!」

「ぎゃあああ!?!…」

俺達の追撃を受けて両腕を失ったはぐれにグレモリー先輩が必殺の一撃を繰り出し奴は骨一つ残る事無く消滅した。

「おかげで助かったわ。

アレがロストプレシヤスの力なのね」

「えっと…俺が扱っている物は最低ランクのCクラスの物で先輩が扱っているのは一つ



上なBクラスの物ですよ」

「まだ上があるというの!?!」

ロストプレシヤスの効力に感服したグレモリー先輩だったが兵藤の言葉に二度驚いたのだった。

はぐれ悪魔の討伐の翌日の放課後の帰り道…

「はうつ?!?何故何も無い所で転んでしまうのでしょうか?…」

「だ、大丈夫か?」

「…」

俺と兵藤はシスターと邂逅したのだった。

# E P V 「遺物使いと聖女と悪魔払い」

S i d e 蒼真

兵藤を保護下に置いてから数週間が経ったある日の事だった。

「あー蒼真先輩、訓練の事なんすっけどここしばらくお休みにさせてもらってもいいですかね？」

「何？力は大分ついてきているから別に構わないが…」

「あざっすー！」

「お、おい？」

兵藤は俺に訓練を休む断わりを入れてきた。

許可を出したは良いが、それを聞いた彼は即座に出て行った。

「…もしもの時の保険だ。保護下権限を行使する」

建前を立てて俺はふと少々気になったので兵藤の後を数日間追ってみる事にしたのだが…

「…おろ？…」

此処数日間尾行して分かった事は兵藤が金髪の美少女と待ち合わせ、所轄デートの様

なものをしていた事だった。

だがその件の少女が今日の所は約束していたであろう時間を過ぎても現れなかったのだ。

「兵藤、彼女が現れないようだが？」

「うおっ!?!先輩見ていたんすか?!」

「最初からな」

「はあ…彼女アーシアっていうんすけどこの街の教会に配属されたみたいなんすよ」

「ああ、十中八句彼女が迷っていた所にお前が案内したと…つてん?…」

「仕事でも入っちゃったのかなあく?連絡先交換しとけばよかつたなあ…」

そう項垂れていた兵藤だが一方彼の言葉を聞いた俺はおや?と思いき事前調査していたこの街の施設情報を思い出し記憶を探ってみる。

「すまん、兵藤一ついいか？」

「はいなんすか？」

「確かこの街の教会って思いつき錆びれたままのまともな手入れもされてない様な状態じゃなかったか？」

「…そういえば確かにあんなボロボロな所で少し可笑しいとは思ってはいましたけど

…真逆!?!…」

そう言つて兵藤は俺と顔を見合わせる。

「その真逆かもしれないな…お前が襲われた件といい今回の件といい恐らく墮天使勢力が関係しているかもしれない」

グレモリー先輩から彼女達悪魔を含む墮天使、天使の三勢力間のすくみの情報を得ていた俺はそう結論付けた。

「な、なら急いで探さないと…!」

「待つんだ兵藤。今あの廃教会に行つた所で素直に彼女に会わせてくれるとは到底思えん。

だがもし仕事で外に出ている場合なら…」

俺はスマホである地点をいくつもマークしてあるマップを出した。

「先輩これは?」

「もしもの時の為にと思つてグレモリー先輩に聞いておいた眷属達が契約を結んでいるという一般人の家を示したマークだ」

「それじゃあ!」

「しらみつぶしに探すんだ!」

「了解つす!」

もしもあの少女の仕事に彼女一人だけではなく同僚、かつての彼の様な人物が居たの

なら間違い無く死人が出る。

そう悟った俺は兵藤と共に契約者の家をしらみつぶしに訪れて安否を確認し回った。そしてしばらく時間が経った後、俺達は一旦落ち合う。

「そつちはどうだ兵藤？」

「駄目つす！契約者の人達の無事は確認出来たんすけどアーシアは未だに…」

「そうか…なら後残るは…」

恐らく此処を逃したら大変な事になる…そう思っていた時だった。

「きゃああああー!？」

「!？」

女性の絶叫が付近の民家から聞こえてきたのだ。

「今のは…間違い無い！アーシアの声だ！」

「ビンゴか！だが…兎に角急ぐぞ！」

「はい！」

兵藤がそう確信し、俺は想定していた最悪の事態に陥ったであろう事に苦虫を噛みながら件の民家へと急行した。

「お、お邪魔しまーす…」

家の鍵は開いていた、というよりピッキングされた形跡があった。

やはりか…

「兵藤は此処で待機している、俺が見てくる」

「了解っす！」

兵藤には待機を指示し俺は契約者の家の奥へと進んだ。

其処で目にしたものは…

「チッ…」

「こんな事って…」

俺が目にしたのはまるで十字架の張り付けを再現したかの如くこの家の住人であった男性が滅多刺しにされ寝室の壁に串刺しにされていた光景とその近くで落胆し涙を流すアーシアと呼ばれていた少女の姿だった。

もう男性は生きていないだろう…その横には小さい文字で何かが書かれていた。

「むっ…」

「悪い奴等にはお仕置きよ」って偉い人の言葉でありますよっと！」

「！」

ガキン！

「おっ…」

ふと背後からそんな声が聞こえ俺は咄嗟に懐から取り出した龍燐で襲い来る攻撃に

備えた。

真逆防がれるとは思っていなかったのか仕掛けて来た当人は間抜けな声を出していた。

「先輩！今の凄い物音は一体…ッ!?」

先程のぶつかり合う物音を聞いて飛んできた兵藤は今のこの惨状を見て酷く嗚咽を漏らす。

無理もないな…俺は今迄の出来事で最早慣れてしまっているからあまり問題は無いが。

俺は先程攻撃を仕掛けて来た奴に向き直り睨み付けながら言う。

「オイ…この惨状を引き起こしたのはそこのお嬢さんではなくお前で間違い無いな?」

「イエスイエス!この私、フリード様がその悪魔と契約しているクズ人間を始末してやったんだよおー!っていうかなんで此処に只の人間が居るんスカあ〜?まあ見られたからにはお前等も始末しちゃうんだけどさあー!」

自らをフリードと名乗った神父の男は悪びれもせずになんか言い放ってきた。

アーシアもトンデモナイ奴と組まされたものだな。

「兵藤その子連れて早く逃げろ!コイツは俺が相手をする!」

「先輩!」

「早くしろ！その子が居ては足手纏いになる！」

「わ、分かりました！さ、アーシアも早く！」

「い、イツセイさん……」

「そうはさせるとお思いですかなあ……と！」

兵藤達を避難させようとするもやはり神父が妨害しようとしてくる。

だが

「させると思うか？」

俺はすぐに水鉄扇を取り出して水壁を発生させる。

「ぶわっぶー!?」

「今だー！」

神父は水壁に激突しびしょ濡れになる。

その隙に兵藤達は此処から離脱した。

「こんのおく！只の人間がよくもやりやがりましたねえー！テメエもう生かして帰さねえぞー！」

「さっきのを見てまだ俺が只の人間だと思ってるのは間違いなんだがな……」

フリードは激昂して又も俺に襲いかかってくる。

が負ける俺ではない。



「はっ!」

「んなっ!?!:真逆テメエ神器使いだっただのか?」

「似て非なる物だ。」

此方も一つ聞きたい。

「ジョージ・エヴァンスという名前に聞き覚えがあるか?」

俺は神父に質問を返す。

「ジョージ・エヴァンスウ?聞いた事ねえなあ…」

俺はかつて敵対した人物の名を問う。

もし彼の所属先の間人であったなら迷惑をかける事になると思ったからだ。

だが当のフリードはどうやらそうではないようだ。

「そうか…:ならお前にもう用は無い!一氣にいかせてもらうぞ!」

水流よ!荒々しき風を起こせ!水嵐!

俺は水鉄扇を振り水の流れを変えてまるで風の如き水流に変化させてフリードに向

けた。

「な、何だあ!?!ぐう!?!い、息が出来!?!…」

「台風の最中の水中に居るみたいだろ?」

「安心しろ俺がこの場を離れば効力は無くなる」

最早息をするのに必死で聞こえていないであろうフリードを見て俺は早々にこの場を離れたのだった。

## E P V I 「遺物使いと墮ちた天使の陰謀 P A R T I」

S i d e 蒼真

「駄目よー」

「なんでなんすか!？」

此方でシスターであろう少女アーシアを一時保護した事をグレモリー先輩に報告していくと何故か駄目出しを受けた。

それに兵藤が何故かと問う。

ちなみに俺が沈ませたあのフリードとかいう神父は俺が去った後に異変を感じてやってきたグレモリー先輩達が捕縛しようとしたが墮天使側からの予想外の増援が来た事で逃げられたらしい。

「貴方達は私達と関わっているのよ！それが向こうに知られば只じやすまないのよ！

それにはぐれシスターを保護してくるだなんて…」

グレモリー先輩は俺達の身の心配をしているみたいだが…

「すまないが協力関係を結んだとはいえそちらの軍門にまで下った覚えは無いぞ？」

「う…それはそうだけど…」

「という訳なんで其方で保護が出来ないのなら彼女は引き続き此方で保護させてもらうぞ。」

戻るぞ兵藤」

「あ、はい……」

「待ちなさい話はまだ……」

グレモリー先輩の静止を振り切り俺達は旧校舎を後にした。

さて、シスターアーシアについての話だ。

アーシアは生来から天涯孤児の身でカトリック系の教会に拾われて過ごしてきていたようだ。

どうやら彼女は回復系のいぶ……じゃなかった神器を持っていたようでそれで訪れる教会信者達の傷を癒して聖女だと祀り上げられていたようだ。

だがある日何故か敵陣地である筈の教会の敷地内で酷く傷付いて倒れている悪魔を発見したアーシアは持前の優しさを発揮してその悪魔を癒した。

それが間違いだった……悪魔をも癒す事が可能であったその力を他の神父に目撃されてしまった事で他の者達も掌を返したかのようにアーシアを魔女だと罵り始めて遂には教会から追放処分を受けてしまい、途方に暮れていた所を墮天使勢力に拾われて今に至るとの事だった。

「これが私に与えられた主の試練なのでしょう…」

「酷え…」

「何よソレ…」

「かわいそう…」

「…」

アーシアの話聞いた兵藤とレンカ達が同情を示していた。

一方俺は訝しむ。

もしかしたらと…後で聞いておく必要性があるな。

「兎に角アーシアは兵藤の家でホームステイするって事で良いんだよね？」

「は、はい！」

「という訳だ！彼女の事よろしく頼んだぞ兵藤」

「了解っす！」

話し合いの結果、窮屈であろうビアンカのラボで保護するよりも兵藤の家でホームステイという形でアーシアには居てもらおう事になった。

兵藤の親は二つ返事で了承してみたんだ。

だが数日後に事件は起きた。

街中を出歩いていた兵藤とアーシアが突如現れた墮天使の男に襲われてアーシアが

連れ去られたとの事だった。

## EP VII 「遺物使いと堕ちた天使の陰謀PART II」

Side 蒼真

「イテテ…すんません先輩…俺が不甲斐無かったばかりに…」

「一体何があつたんだ？」

「それが…」

兵藤は起きた事を話出す。

時は遡り、Side 一誠

「ええつと…母さんから頼まれていた物はこれで全部かな？」

「そうですね」

俺は数日前からホームステイする事に決まったアジアと一緒に夕食の買い物に商店街に出ていた。

そして買い物物を済ませて帰路に着いて少し時間が経った時だった。

「待って下さいよ姉様〜！ってお!?」

「其処に居るのはアジアね!?良かった！探していたのよ…ってえ!?」

「!?」

「あ…れ、レイナーレ様！それにミッテルトちゃんも…」

俺は酷く驚いた。

俺に傷を負わせてきた張本人である夕麻ちゃんと仲間であろう金髪ツインテール口り美少女墮天使と偶然遭遇したからだ。

アーシアは夕麻ちゃんの事をレイナーレと呼んでいたがそれが彼女の本名なのか。

「イツセー君生きていたのね…」

「夕麻ちゃん…」

俺を目にした夕麻ちゃんは驚きながらもどこかホッとしたかのような表情をしていた。

先輩の言った通りだ、彼女のあの時の行動は自分の意思で実行した訳じゃない事は俺は気が付かされる。

「!?ね、姉様！もう追手が…！アーシアまで居るとあつちに知られたらヤバイツス…！」

ミッテルトちゃんと呼ばれた墮天使がそう告げてくる。

「！アーシア、イツセー君も早く此処から逃げて！説明している余裕は無いの！」

ミッテルトちゃんの言葉に夕麻ちゃんは鬼気迫るかの様な顔でそう言うってくる。

だが其処に…

「一体誰が何処に逃げるですって?」

第三者の声が聞こえてきて夕麻ちゃん達は顔を強張らせる。



「か、カラワーナ…それに…」

「ふむ、裏切り者を追っていたらアーシア・アルジエントまで確保出来ようとはな」

「ど、ドーナシーク…！」

カラワーナと呼ばれた青い長髪の女性墮天使とドーナシークと呼ばれたおっさん墮天使が夕麻ちゃん達に詰め寄ろうとしていた。

「どつちが裏切り者なんスか！総督様に知られれば只じゃ済まないのは分かっている筈っすよ！」

ドーナシークの言い分にミッテルトちゃんが反論する。

「だからこそ入念に下準備を進めてきたのだよ！そう、この様に！」

「!?」

ドーナシークがパチンと指を鳴らすと突然俺の隣に居た筈のアーシアと夕麻ちゃん達の姿が一瞬消えて、気が付くとドーナシーク達が連れていた取り巻きの墮天使達に取り抑えられてしまっていた。

「キャア!?!」

「い、イツセーさん…！」

「強制転移の陣!?!何時の間に!?!…、この離せっすよ!?!…」

取り抑えられてしまい藻掻くがドーナシーク達は意に返さない。

「念の為に前達にもマーカーを付けておいて正解だったな」

「は、嵌めたのね!…」

「精々大人しくしておくんだな。連れていけ」

「はっ!」

「アーシア!? 夕麻ちゃん!」

俺が助け出す隙も無くアーシア達はドーナシークに指示された取り巻き達に何処かへ連れ去られて行ってしまった。

「最終段階を迎える為に私はこれで戻らせてもらうがこれ以上我々の計画を邪魔立てされては困るのでな…此処で排除されるが良い人間!」

カラワーナ、お前達いけ!」

「はっ!」

ドーナシークの指示を受けたカラワーナ以下数人の墮天使が一斉に俺に襲いかかってきた。

ドーナシークは不穏な言葉を告げこの場から去っていった。

「死ね、人間!」

「くっ!?!…」

俺は咄嗟に籠手とりボルピングアローを出して墮天使達に応戦するが如何せん数が

多過ぎて単射式のこれじゃあ迎撃が追い付かない!…

「ぐっ!?!…」

遂には致命傷は運良く逃れたが光の槍が右足膝に当たり俺は激痛に苦しむ。

「なんだどんな危険な神器なのかと思えば只の「龍の手（トウワイズ・クリティカル）」じゃない」

「龍の手?」

「そう、冥土の土産に教えてあげるけどそれはありふれた物よ。

アーシア・アルジェントの持つ「聖母の微笑み（トワイライト・ヒーリング）」と違ってね!

可笑しい玩具もあるようだけど脆弱な人間如きが歯向かってくる事自体が片腹痛いのよ!

そのままくたばりな!」

カラワーナがそう好き勝手に言い放ってくる。

ヤベエ…早く蒼真先輩を呼ばないと…俺の意識は其処で途切れた。

Side 蒼真

「という訳なんです…」

「…」

兵藤から事の次第を聞いて俺は思案する。

「成程な…事は急いだ方が良いかもしれんな」

「え？」

「お前の話を聞いてみて簡潔にまとめてみたが恐らく敵の狙いはアジアに宿っているという神器そのものだ！」

「ええ!!」

「恐らく何らかの術式で神器を奪おうと画策している！

だがしかし問題が有るんだ…」

「問題？」

「ああ、先日グレモリー先輩に聞いたんだがどうやら神器という物は宿った者の魂と例外無く結びついていっているらしくてな…半端に分離させようとするとその者は命を落とすってしまうらしい…兵藤、お前はそいつ等が上層部に黙って事を起こそうとしているみたいな発言を聞いたのだろうか？」

「え、ああ…確かに夕麻ちゃんがそんな事を言っていた気が…」

「ならば尚更急ぐべきだ。」

上層部に黙って事を起こそうなんて考えてる連中が正式な手段を用いれる訳がない

！

グレモリー先輩に早急にこの事を伝えるんだ！  
連絡したらすぐに出るぞ！」

「は、はい！」

俺はそう確信し行動に出る事にした。

そしてしばらくして俺達は廃教会の前までやって来ていた。

其処に

「やあ、お待たせしたね」

「お、来たか」

グレモリー先輩から話を聞いて駆けつけて来た眷属である木場 佑斗と搭篠 子猫と合流する。

「話は部長から聞きました。

神器を強引に奪い取ろうだなんてこれ以上勝手な事はさせません！」

「僕も神父には個人的に良い感情は持ってないからね。

協力は惜しまないよ」

そう搭篠と木場は言う。

木場の方は何やら因縁があるようだが…。

「兎に角突入するぞ！でやあー！」

俺が廃教会の扉を蹴破りそれに続けて兵藤達が入る。

ジョージが目にしたら卒倒しちゃうだろうが…。

「何事お!？」

「またお前か!」

廃教会に突入するとあのフリードとかいったイカレ野郎神父が驚きながらも此方へ来る。

「げっ!?! テメエはあん時の!…しかも悪魔のあんちゃんとは一緒とはね!」

「だったら悪魔だけでも!」

「五月蠅いです」

「へげぶっ!」

イカレ野郎は俺の姿に驚きつつもまずは自身の敵である搭篠達に一目散に向かっていった。

「だが搭篠の一撃でいとも簡単に撃沈する。」

「おのれ悪魔共め!」

そこで増援できた他の神父達が此方へ一斉に襲いかかって来る。

「妄信野郎はとつとと沈め!」

「ぐわああ!?!」

水嵐で一氣に殲滅する。

「ソウマ、こゝ怪しい」

「出かした!」

粗方片付けた所で今回連れてきていたトワナ（レンカは留守番）が地下室へと繋がる隠し通路を発見する。

そのまま一氣に俺達は進んで行つた。

「ドーナシーク!」

「む?…悪魔共が此処を嗅ぎつけてきたようだな…それにお前はあの時の人間!

カラワーナに始末させたと思つていたが…」

「お生憎様この通りピンピンしてるぜ!とつととアーシアを返しやがれ!」

ドーナシークと呼ばれたオツサン墮天使が俺達の姿を目にするとそうさも興味無さそうに言い放ち、兵藤は彼にそう告げる。

「それは御苦労な事だな。だがもう遅い!」

「なつ!?!真逆もう儀式を!?!」

ドーナシークは此方を挑発するように言い放ち、木場がそれに驚く。

「嫌ああああ!?!」

「アーシアアア!?!」

ドーナシックの背後の魔法陣が輝きを放った瞬間、アーシアが苦しみ出す。遅かったのか!?

「ふはははー！これで私はもっと高みへとゆけるのだ！」

高笑いを上げながらドーナシックはそう言い放つとアーシアの体から出てきた光が奴の体へと入り込む。

「やはり己の権力向上の為に彼女を利用したのか！」

「その通りだ。所詮は優しさなどという愚かさしか持ち得ないはぐれシスターでしかないアーシア・アルジェントよりもこの私の方が有効活用出来るのだからな！」

ドーナシックは悪びれることも一切無くそう言い放った。

なんて奴だ！

「おっとそうだった。この腑抜け共は解放してやろう！最もアーシア・アルジェントはもの言わぬ屍でしかないがな！」

「うう!?…」

「ああ…アーシア…なんて事!…」

ドサツと乱雑にアーシアと彼等からすると裏切り者であるレイナーレとミツテルトが傷だらけで無造作に投げ置かれた。

「さあ、後は奴等を始末し此処から立ち去るまでの事！」



者共かかれえい！」

「はっ！」

ドーナシークが指示を出しカラワーナと呼ばれた年増墮天使及び取り巻きの墮天使達やらまだまだ居た大勢のはぐれ神父達が此方へ襲いかかってこようとしていた。

「兵藤！俺達で他の奴等を相手取るからお前はあのオッサン墮天使の糞野郎をブツ飛ばしにいけ！」

「え？でも……」

俺は即座に兵藤にそう告げるが彼は渋る。

「いいか、お前に宿っている神器がありふれたものであつたならあんな急激な代謝の上昇具合はあり得ないんだ！

だからこそその籠手はきつと希少な代物であるに違いない！」

「コレが……ああ、分かつたよ！」

俺の予想を兵藤に告げると彼は決心し、ドーナシークにへと向かつていった。

「さて……堕ちるに堕ちた天使さん達よ覚悟は良いな？」

「友達を傷付けた事絶対許さない……」

兵藤の背を見送つた俺とトワナは討つべき敵達に向き直る。

「へえ、アンタ達見た所只の人間みたいだけど我々に齒向かつて只で済むと思つてい

のかしら?」

「なあに、すぐに嫌でも理解する事になるだろうさ…お前達の過ちが俺やトワナを只の人間であると侮った事をな!ほーい!」

「う、うわああー!?…!」

「!?!」

水嵐で半分程襲い来たはぐれ神父達（後の半分は木場達が相手している）を纏めて掃除する。

その光景に年増と取り巻き堕天使達は驚く。

「き、貴様も神器持ちだったのか!?!」

「似て非なるものさ、そしてこういうものもある!」

俺は水鉄扇を仕舞い、コレクションから新たに俺が持つランクAの中で最も信頼を置いているとあるマッドサイエンティストの傑作である鎖付きの緑の鍵爪「ブーメチェーング・スラッシュャー」を取り出し射出する。

「ぐわあああー!?!」

避け切れなかった取り巻きの一人に鍵爪が直撃し苦痛に悶える。

「それっ!」

「があああ!?!…!?!」

一気に鍵爪を引き抜いて絶命させる。

「馬鹿な!? あり得ん!? 神器を二つ宿しているなど!?」

どうやら敵は神器だと勘違いしているが俺は攻撃の手を緩めない。

「其処だ!」

「そんな直線的な攻撃に当たるものか!」

俺の追撃に対してもう一人の取り巻きが飛んで回避しようとする。

だが鍵爪は方向を変え回避したと思ひ込んだ取り巻きの横腹にへと掠った。

「な……に!?!……」

「追尾式だよ、どらあつ!」

「がっ!?!……」

追尾した鍵爪は遂に奴の首元に巻き付き絶命させる。

「さあ、後はアンタ一人だ!」

「な、舐めるなあー!」

部下がいつも簡単にやられたの目にしたカラワナーは激昂し光の槍を投擲してくる。

「トワナ!」

「うん!……」

対する俺はトワナを傍に引き寄せて空いている左手を彼女の手の平と重ね合わせた。

「へエンゲージン!!…!!」

ドラゴンである彼女と結んだ絆の契約を発動し、俺達の周囲を深き紫の炎が包み込む。

「何ツ!?!…」

その炎に触れたカラワーナが投擲してきた光の槍は跡形も無く飛散し、それを見た奴は驚愕に満ちる。

「な、何なんだお前達は!?!」

「俺は只のしががない高ランクブレイカーでしかないさ。但しパープルドラゴンと絆を紡いだな!」

「ドラゴンとだと!?!…戯言を!」

「戯言じゃないさ! トワナ!」

「逃がさない!…!!」

「がはあつ!?!…」

俺の指示でトワナがドラゴンの証である紫色の龍翼を広げ、カラワーナ目掛けてその翼を振り下ろした。

回避し切れなかったカラワーナは物の見事に地に叩き落とされ隙だらけとなる。

「今だ!」

「あがつ!?!…」

鍵爪を再び射出しカラワナーの胸元へと突き刺した。

「コレでトドメだ!」【ドラゴニックウイスプクロー!!】

フックショットの要領で撃ち込み飛び込んだカラワナーの眼前で俺はトドメの一言を放った。

「あああああー!?!気高き墮天使である筈のこの私がこんな餓鬼にいいいー!?!…」

トワナの紫炎の力が加わった鍵爪のエネルギーを体内に撃ち込まれ奴は激しく燃え上がり最後には黒い羽根だけが残された。

「何が気高いだよ…」

俺は残った羽根も斬り裂いて一息つくのだった。

## E P VIII 「遺物使いと墮ちた天使の陰謀PART III」

蒼真がカラワーナ達を倒したその頃、Side一誠

「く、クソツ!?!…」

「龍の手を宿しただけに過ぎん只の人間如きが此処迄粘るとはな…だがその悪足掻きすらも出来る力なぞ最早残ってなぞいまい!此方にはアーシア・アルジエントから奪ったこの聖母の微笑みが有る!何方が優れているかは明白であろう!」

俺はアーシアの命を彼女が宿していた神器目で奪い、嫌がる夕麻ちゃんに俺を襲わせ、グレモリー先輩と契約を結んでいた人達を襲わせた張本人であるドーナシークに立ち向かったが追い詰められてしまった。

腐つても相手は墮天使であり、飛べるといふ利がある奴には俺が神薙戯先輩から貰ったロストプレシヤスでは攻撃を当てる事すら出来ずこつちの体力が削られていくばかりだった。

ならば…

「俺に宿った神器よお!先輩の言う通りに凄いい代物なら俺にあの糞野郎の顔に一撃だけでも入れられる力を!」【BOOST!】

「まだ無駄な足掻きをするか…所詮は1にいくら二乗を重ねた所で此方には何ら脅威でないわ！」

これで命果てるがいい！」

俺は己に宿った神器に力を願う。

籠手から力が流れ込んでくる。

対してドーナシークはそれを用意にも介さず追撃を加えようとしてくる。

だが其処で想定外の出来事が起きた。

「!?」

俺の懐が突然眩い光を放ち出したのだ。

それに俺は勿論の事、追撃状態に入っていたドーナシークもこの輝きに目が眩み動きが止まる。

その光を放ったものの正体は神薙戯先輩からもう一つ譲り受けていた用途不明のままであったコイン型ケースだった。

「何だ?…」

俺は咄嗟にコインケースを取り出して見てみる。

するとホログラム映像の様なのがコインケースから浮かび上がったかと思うと其処から大分大きい何かの卵が出現したのだ。

「た、タマゴオ!? おつととー!…」

うつかり落としそうになり慌ててキャッチする。

コインケースから卵が出てきたのにも驚きだったがこの窮地を挽回出来そうにはとても見えない。

「ふん、何事かと思えば只の苔脅しの様だな! ならばもうトドメをくれてやろう!」

予想外の事態に混乱している俺に対しドーナシックは追撃の態勢を整え直していた。

ヤバイ!

「死ねえー!」

無慈悲にも奴の光の槍がこつちに向けて投擲される。

とても防ぎ切れるモノじゃない!…そう悟った俺は襲い来る痛みにも備えようと目を閉じた。

「…あれ?…」

痛みが襲ってこない?…不思議に思ってみ上げるとドーナシックにも想定外の事が起きたようで驚愕の表情を浮かべていた。

一体何がと思い視線を正面に戻すと…

「…」

「うお!」



何時の間にか割れていた謎の卵からなんと金髪の幼い全裸の少女が出てきて不思議な力を発してドーナシークの槍を弾き落としていたのだ。

「な、何者だ!?!」

「…」

ドーナシークが謎の少女に問いかけても彼女は無言のまま何も語らない。

「ええい！何者なのか知らぬが脅威と見た！」

「貴様も死ぬがいい！」

痺れを切らしたドーナシークは再び光の槍を差し向けてようとしてきたその瞬間の事だった。

「…や———!?!」

「ぐわあああ——!?!」

突然、謎の少女が絶叫を上げ始め、それに対してドーナシークの野郎がまるで激痛に襲われたかのように悶え、構えていた槍が手から離れ飛散した。

だが俺に対してはちよつとうるさいというだけの感覚しかなかった。

「…」

ひとしきり叫びを終えた後謎の少女は俺に近付いてきた。

「な……ん!?!……」

そして少女の手が俺の籠手に触れると突然奇妙な感覚に襲われる。

「エン…ゲージ…」

俺と少女がそう言葉を発すると俺の体に先程とは違う感じの力が流れ込んでくる。

これなら！

「真価を見せやがれ、俺の神器！」

【BOOST！】

「まだだ！」

力のチャージを止めずに俺は更に想いを込める。

【ウエルシユドラゴン！バランズブレイク！】

今迄とは違った音声が流れたかと思うと俺の体は紅き龍の鎧に包まれていた。

「ぐ、くそ…何だ!?この魔力の高まりは!?…馬鹿な!?ありえん!何故たかが貴様の様な人間如きがこれ程迄の、上級いや魔王にも勝るとも劣らない強大な力を持ち得ている!?…」

頭痛から回復復帰したドーナシックは今の俺の状態を見て驚く。

奴は目に見えて俺に恐怖を抱いているみたいだ。

「ああ、どうやらこれでテメエに一撃を入れられるようだ！」

「ひいつ!?な、舐めるなよ小僧——！」

俺はドラゴンアーマーの翼をはためかせて奴の眼前へと迫る。

ドーナシークも負けじと反撃してくる。

「しやらくせえ！」

「そんな馬鹿な!?!?!」

「隙有りだ! おりやあぁ!」

「しまっ!?!?! ぶべええー!?!」

俺は拳の一撃で奴の光の槍を砕く。

当然奴は驚くが隙を見逃さず更なる一撃を入れた。

「か、回復を……」

「させるかよ! まずはテメエ等の下らない計画なんぞに利用された夕麻ちゃんとミツテルトの分!」

「ぶっ!?!?!」

傷を回復しようとするドーナシークだったがそんな事はさせない!

ストレートパンチを入れて奴を壁にぶっ飛ばし叩き付けてやる。

「次はテメエの汚い欲望に殺されたアーシアの分!」

「がはあっ!?!?!」

更には奴にキックをお見舞いする。

「そして最後はあー！」

「ひ、ひぎい!?!」

情けない声を出しながら野郎は尚翼を広げ逃げようとする。

だがもう遅い！

【OVERBOOST!】

「俺と…テメエ等に殺された人間達の怒りの一撃だあー！」

【EXPLOSION!】

「リボルビングドラゴンアローレイン」!!」

「ぎゃあああー!?!」

土壇場で編み出した技を繰り出してドーナシックにトドメを刺す…と思ったがスレスレに撃ち込んで気絶へと追い込んだ。

「テメエには正式な裁きがりアス先輩から下される筈だ…それまで精々怯えていろ！」

俺はそう気絶した野郎に向かって言い放った。

「兵藤！」

「無事ですか!?!」

他の取り巻き達を倒したであろう先輩達が駆け付けてくる。

俺はそれを見て緊張の糸が切れたのか意識を手放していくのだった。

## E P I X 「事後処理と新たな波乱」

Side 蒼真

「まあた面倒な事になっちまったな…」

結論から言うところ此方で保護していたシスターアジアが彼女に宿る神器を狙い攫った上でその命すらも奪った墮天使達は片付けられた。

主犯のドーナシックとかいったあのおっさん墮天使は兵藤が覚醒させた神器の力によつて打倒された。

その後の奴はグレモリー先輩の尋問にかけられた後に今回の件と悪魔契約者を襲った件やその他諸々の罪により死刑判決が下され呆気無くその命を散らす自業自得の結末となった。

一度命を落とす事になってしまったアジアはグレモリー先輩が転生悪魔として蘇生させた事により蘇った。

引き続き此方の方で継続して保護という訳にもいかなかったが兵藤家でのホームステイは彼女至つての希望で続ける意向だ。

同時に被害者でもあるレイナーレやミッテルトは無論お咎め無しとの事で自分達の

所に無事帰っていたようだ。

そして一方、俺個人としては非常に頭を抱える出来事が起きた。

「…」

「zzzz」

それは今現在も戦いの疲労で倒れてしまい眠っている兵藤の隣で寝息を立てている金髪の幼女が存在だった。

「墮天使殲滅戦の直後」

「兵藤！」

「大丈夫です、恐らく土壇場で覚醒させたばかりの神器の力の放出に耐え切れなくてその疲労が祟っただけでしょう。少し休ませればじきに目を覚ます筈ですよ」

「そうか…ン？アレは!?…」

倒れた兵藤に駆け寄って様子を見ると木場がそう言うってくる。

俺は一安心した直後、あるものに気が付く。

それは兵藤のすぐ近くで一糸纏わぬ姿で倒れている少女を発見した。

俺はすぐにその少女にかけよって抱き上げる。

そして俺は少女の手の甲を見て驚く。

「この紋様は……って事は真逆！」

少女の手の模様を見てすぐに俺はトワナ達と同じ様な紋様である事に気が付く。

急いで改めて周囲の状況を確認してみると付近に俺が兵藤に譲り渡したあのコインケース型のロストプレシヤスが転がっていてその横に卵の半欠片も転がっている事に気が付く。

最早間違いないよ！この少女もドラゴンだ！それもソサエティでも未確認の…。

「ソウマ、その子エンゲージしてる！ほら！…」

「は!?…本当だ!」

トワナに指摘されて俺は一瞬耳を疑った。

どうしてかこの少女が生まれた直後なら付けている筈が無い金色に輝く指輪が確かに彼女の指に填められていた。

「マジかよ!…」

「先輩どうしたんです?」

真逆と思い俺は再度兵藤の状態を確認してみると彼の指にも少女が持つ同じ色の指輪が填められていた。

恐らく兵藤が土壇場で神器を覚醒させる事が出来たのも少女とエンゲージを結ぶ事が出来た事もあつたからだろう。

だがそれはブレイカー見習いとなってそう経っていない兵藤も生まれた直後の少女

にも双方の相当な負担となってしまう。

こりやあ目覚めるのに日数がかかるな。

幸いしたのが少女の刷り込みだ。

もし運悪く最初に目にしたのが敵だったら相当不味い事になっていたに違い無い。

一方、ドラゴンの事を知らない木場達は話についていけず頭に？を浮かべているが彼等にも後で説明しないとな。

「…はっ!?俺は確かあの野郎をブツ飛ばして!…」

「お!漸く目が覚めましたか!」

「神薙戯先輩!つてこの子は!?!…つてかあの後どうなったんすか!」

「少し落ち着け、一からきつちりと説明してやる。

それとその子の事とお前にもこれから起きるであろう面倒毎についてもな…」

「は…?…」

漸く先に目を覚ました兵藤は俺に詰め寄って来る。

俺は一から説明するのだった。

Side 一誠

「良かった!…夕麻ちゃん達も怪我が治ってアーシアは生き返れられたんすね!」

「同時に此方の保護下からは外れる事にはなったがな…」



「そのようすね…」

蒼真先輩から事の次第を聞いてアーシア達が助かった事に俺はほっとした。

それと同時に俺に宿った神器が十秒毎に力を事実上無制限に倍加させられる「赤龍帝の籠手へブーステッドギア」と呼ばれる世界に十三種しか存在しないと云われている極めれば神様すらとも対等にやれるであろうとされる神滅具【ロンギヌス】の物凄い代物の一つである事が判明した。

「あの時はもう無我夢中で…」

「それについてなんだが…今その力を扱えるか？」

「へっ?…」

蒼真先輩に指摘されあの時の様に強く念じてみるも籠手だけが出現しあの龍の鎧は発現しなかった。

「やっぱりな」

「どういう事なんです?」

「お前が土壇場で神器の力を覚醒させられたのはお前自身の力だけじゃねえって事だよ」

蒼真先輩がやはりといった表情でそう言う。

「俺の力だけじゃない…」

「ああ、その子とお前がある契約を結んで力を解放したから出来たと見て間違い無い……その子はなトワナ達と同じドラゴンの子なんだ！」

「ええ!? この美幼女がドラゴオン!? ってこれは? ……」

蒼真先輩から俺の隣で眠っていたあの謎の少女の真逆な正体を聞いて俺はとても驚いた。

ふとした拍子に手を見ると身に覚えのない指輪が己の指に填まっている事に気が付く。

金髪少女にも同じ色の指輪が填まっている。

「それがドラゴンと結んだ契約〈エンゲージ〉の証で力の象徴でもある指輪だ」

「コレが……」

蒼真先輩は両手の薬指に填まっている俺とは違う紫色の指輪を見せてくる。

彼の傍に居たトワナちゃん達も同じ様な指輪を見せてきた。

「そういえばあの時この子から力が流れ込んでくる感覚が確かにあった……」

俺はあの時感じた奇妙な感覚を思い出す。

「それとあのコインケースだがアレは俺は只他のロストプレシャスを収納するだけのコインケースなのだと思っていたのだがビアンカに詳しく調べて貰ったらとんでもない勘違いでそして驚くべき事が分かった。」

あれはロストプレシヤスの収納ケースなんかじゃなくドラゴンの卵を異空間へと格納し格納した卵の孵化を促す為のいわばドラゴンエッグハッティングマシンだったんだ！

それに調べていてもう一つ判明したんだがあのケースにはなんと後三つの卵が仕舞われている事も分かったんだ！

「ええ!？」

「ケースの裏側を見てみる」

あの少女と同じような子が後三人も生まれてくるって事か。

蒼真先輩は粗方調べ終えたコインケース改め孵化器を俺に再び渡してきた。

俺は彼の言う通りにその裏側をみて見る。

するとそこにはそれぞれの枠組にまるで何かの数値を示したの様な表示があった。

「これって…もしかして…」

「ああ、恐らくは孵化するまでの時間を差し示したものだろう。

孵化を迎える瞬間にケースから解放されるって所だな。

恐らくあの子はその時が迫っていたからこそかそれか…」

蒼真先輩はそう言って思案する。

「その物言いだと何か他に原因があるんすか?」

「…ああ、これは俺の推測でしかないんだがな…兵藤の神器もドラゴンの力が封じ込められたものだろう？」

恐らくあの時解放した力の余剰分がケースにも流れ込んだ事で直近で孵化が近かったあの子の卵が同じドラゴンの力の刺激を受けて予定よりも孵化が早まった可能性もあり得ることはないんだ。

あくまで推測でしかないんだが」

「それは…」

蒼真先輩の考えを聞いて俺も感心するしかない。

「まああの子のパートナーはもうお前で確定事項なんだ」

「へっ?」

「エンゲージも交わしてるしそれに刷り込みの事もあるからな」

「刷り込みって鳥とかにあるあれすか?」

「そうだ、だから大事にしてやれ。」

他の卵は…今後お前がどうしたいか自分で考えてくれ。

それはもうお前のモノではあるんだからな。

ただし万が一にも悪意を持った奴に奪われるような事にはなるなよ?」

「は、はあ…分かりました。」

この兵藤一誠、全力でやらせて頂きます！」

蒼真先輩からそう忠告を受けた俺はそう決意表明しながら未だ眠っているドラゴン少女を撫でてみる。

その時だった。

「ふみゆ?…」

「おっと?」

くすぐったかのかドラゴン少女がすぐに目を覚ました。

そして俺を目にした瞬間

「あー。パパー!」

「おわあっ!」

ドラゴン少女はそう俺に向かって言いながら飛びついてきた。

「成程、そうきたか!」

その様子を見ていた蒼真先輩はしみじみしていた。

「…ふと思っただんすけど先輩の方はどうだったんです?」

まるで自分の時は違ったと言いたげな先輩の態度を見て俺は聞いてみる。

「そうだな…頼む!」

聞いた瞬間、先輩がレンカちゃんに向けて超絶スピードに土下座をしていた。

ええ？…

「も、もう！…お、お兄ちゃん…！」

「お兄様…」

レンカちゃんは何となく物凄く恥ずかしそうにしながら先輩に向けてそう言い、トワナちゃんもさも当然のように言った。

「も、もう良いでしょ?!」

「…見事だ！…」

「ちよ?!先輩イー?!」

蒼真先輩は鼻血を出しながら昇天していた。

戻ってきてくださーい！

「はっ?!いかにいかに尊死しかけたわ!…」

まあレンカちゃん達みたいな美少女にそんな事言われたら健全な男だったらそんなものも致し方ないな!

「パパのお友達大丈夫!?!」

「ん?ああ、別に心配する事はないと思うぜ…」

俺をパパと呼んだドラゴン少女が蒼真先輩の様子にびっくりしたのか聞いてきたのでそう答える。

「そういや、俺を父親だと認識しているという事は…名前決めなきゃいけないな…。」

「そうだな…今日から君の名前はテリカだ」

「テリカ…うん！パパありがとう！」

レンカちゃん達の名前が花っぽいなどとも思ったから俺もあやかって付けた名前を彼女は凄く喜んでくれた。

ああ、感無量だぜ！

そう俺も喜びに浸っていた時であった。

プルル！

蒼真先輩のスマホが鳴り出す。

「ん？戸倉さんからか…丁度良いタイミングだな。」

こつちも報告しないといけない事があるからな」

そう言つて先輩は部屋から出ていった。

それが新たな波乱の幕開けとなるのはまだ誰も知る由もない。

## 遺物使いと月光校庭のエクスカリバー編

### EPX「遺物使いと奪われし者達の想いPART I」

S i d e 蒼真

「何だつて!?! ジョージ・エヴァンスが重傷で緊急入院だど!?

一体どういう事なんです戸倉さん?!」

俺は戸倉さんからの予想外な事態が起きた事を聞いて驚いた。

仮にも高レベルブレイカーである彼程の男が重傷を負わされるような事があるなんて…真逆な…。

「『ですから、エヴァンス氏はどうやら1ヶ月程前からバチカンの聖堂教会へと出向していたらしく其処で先日とある事件が発生したようでした…』」

「事件?」

戸倉さんが電話口でそう言う。

「『ええ、それがどうやら聖堂教会の方で保管されていた三振りの聖剣が何者かの襲撃を受けて奪われたと』」

「彼は運悪くそれに巻き込まれたと?」



「『そうだと思われますね。しかもエヴァンス氏と一緒に出向いていた同僚の方からの話によるとどうやら彼が所持していたあのロストプレシヤスまでもがその襲撃者に奪われてしまっていたようで…』」

「…」

俺は戸倉さんの事の顛末を聞いて思案する。

戸倉さんもジョージが所持していたロストプレシヤスが今は名も無き物であるがそれが聖剣である事は知っている。

なのにわざわざ分けて言ったのには別の理由があると俺は察した。

「つまり襲撃者はジョージが持っていたロストプレシヤスが聖剣の類である物である事だけは分かっていたと?」

「『その可能性は非常に高いといえるでしょうね。』

詳しくは彼が目覚ましてから聞き取り調査をしてみなければいけないですが…」

「いや、その必要性は無いと思えますよ?」

「『え?…』」

「いえ、彼が大怪我を負わされた上にあのロストプレシヤスを奪われたというのならまずあの人が動かない筈がないですからね」

「『ああ〜!…』」

戸倉さんは納得したかのようによく言う。

同時に俺はこの事態に頭を抱えた。

俺、あの人ちよつとばかり苦手なんだよなあ…。

「兎に角その件は俺に任せてもらえませんか？」

『『良いでしょう！』』

戸倉さんから許可を貰った俺は通話を切り、部屋に戻る。

「あ、報告終わったんすねー」

「おかえりー！」

兵藤はテリカを目一杯撫で回しだらしない顔をしていた。

「そうなんだが想定外の事態が発生したんだ…」

「え？」

「こつちの知り合いが何者かに襲撃を受けて重傷を負わされて緊急入院したんだ」

「ええ!? 大変じゃないすか！」

「まてまて、お前が慌ててどうする。」

話を最後まで聞け」

「すんません…」

俺は兵藤を落ち着かせて彼に先程の話をした。

「それで又三大勢力が関係しているかもしれない?」

「そうとしか考えられんな。」

以前ならアイツか余所のブレイカーの仕業で片付けられていたと思うんだが彼について使えるからついでにといつた感じで狙われた様なものだ。

恐らく又墮天使辺りが怪しいだろうな。

こればかりはグレモリー先輩に聞かないとならんが…」

「もしそうなら墮天使の人材管理どうなってるんすかねえ…」

「俺に聞くな…」

俺達は事態の真相を探るべく翌日の放課後に旧校舎を訪れたのだが…。

「あらっ?」

「む?」

部室に入ると見知らぬ二人の間でいい恰好をした女性が居た。

その中の栗色ツインテールの女性が気付いたかのように此方へ、正確には兵藤の方へと駆け寄ってきた。

「イツセー君?! イツセー君でしょ!」

「え?」

「私よ! 紫藤イリナよ!」

「え？えええー!？」

栗ツインテの少女が兵藤の名を呼ぶと兵藤は困惑した表情になり、少女が名を告げると彼は驚いた表情をする。

「兵藤？」

「あ、紹介しますね。俺の幼馴染の紫藤イリナって子す。

小さい時に親の都合で別れて以来だったんすけど…」

「確かにあの頃はやんちゃしてたけど私だって女の子よ？

ってかその人は？」

今度は紫藤と呼ばれた少女が俺を見て聞いてくる。

「ああ、俺の上司…てか先輩の神薙戯さんっす」

「上司？イツセー君バイトでもしてるの？」

「まあそういった感じだな。

ご紹介に預かりました、神薙戯蒼真だ。

よろしくな幼馴染さんよ」

「よ、よろしく」

俺の自己紹介に紫藤は頭を下げる。

「んでそっちの奴は紫藤さんの同僚かな？」

「本来は只の人間に言う必要はイリナの幼馴染とその上司だというのなら話は別か。

私はゼノヴィア・クオルタ、教会からイリナと共に派遣されてきた戦士だ！」

今度は青いアホ毛が特徴の少女に視線を移す。

「…俺達の事は言っていないみたいだな」

「勝手に言う訳にはいかないでしょう？」

まあそれはそうだが。

「此方も聞きたい事があって来たのだがまずはそっちの要件からで良いぞ」

「悪いわね」

そう断ってグレモリー先輩と教会の少女達は対談を始めた。

俺達は一旦部屋の外へ出て話し終わるのを待つ…と思つたら間違いだ。

部屋の中にはパープルドラゴンが持つ能力で不可視状態になっているトワナを潜ませている。

彼女とエンゲージで繋がっている俺にはグレモリー先輩達の話は筒抜けなのである。

話を盗み聞きしている内にバチカン、聖剣、堕天使コカビエルなどというワードが聞こえてきたので占めたと俺は思う。

その後、話し終えた筈のゼノヴィアとかいった少女が悪魔に転生せざるを得なかったシスターアシアの悪口でしかない暴言を吐いていたのを聞いて俺は兵藤に教えると

彼は一目散に突入して言い放つ。

「アーシアの神器を都合良く見出して使って好き勝手に祀り上げていただけで彼女の優しきや気持ちを理解していないような連中が勝手な事を言ってるじゃねえ！」

「イツセーくん!？」

兵藤の物言いに紫藤は驚く。

「その通りだ。」

彼女は教えを守って事を行っただけに過ぎない。

本当に愚かなのは都合の良いように解釈して誤った判断を下した君らの上層部だろう。」

「なんだと貴様等、我等が主を馬鹿にしているのか!？」

「馬鹿にしているも何もそうしているのは君らの方だと思いが？」

確か聖書には「汝、隣人を愛せよ」って一文があるよな?」

それを守っていたアーシアと今の君の行動をその主様が目にしたらどう見比べるかな?」

「くっ!?!…」

ゼノヴィアが嘯みついてくるが俺の返しに反論出来ずにいた。

「この話は終わりだ。」

君らが言っていた事柄には此方も関わらせてもらうからな！

これは決定事項だ」

「え？」

「赤龍帝を宿しているという其処の男は兎も角、只の人間のお前に何が出来るという!!」  
俺の言葉にグレモリー先輩は疑問を抱き、ゼノヴィアはまた嘖みついてくる。

「それが要件だったんだ。」

其方の話と総合したら此方の知り合いが巻き込まれた事が確定したからな」

「そういう事だったのね……」

「おい、一体どういう事なんだ?!」

俺の言葉にグレモリー先輩は事情を分かってくれた一方、ゼノヴィアは納得がいかな  
いといった風だ。

やっぱり聞かされてなかったようだな……まあ管轄が違うからといわれればそれまで  
なんだが……明らかに教会のセキュリティの甘さが招いた事態だろう。

「そつちのゴタゴタに出向で来ていたこつちの知り合いが巻き込まれて、とある人には  
物凄く大事な物迄もが奪われてんだよ！

管轄が違うから責任は負いませんとでも言い逃れするつもりか？ああ!?!粗雑なセ  
キュリティだったからそんな事態に陥ったんじゃねえのかよ！

「それに俺も任務を任されている街で要らん事されたくないからな！」

「くっ!?…百歩譲って貴様の知り合いが今回の件に巻き込まれてしまった事は此方に非があつたという事は認めて謝罪しよう。」

「だが私は貴様自身を認めてなどいない！」

「俺はキレ気味にそう言うぞゼノヴィアは尚も嘯みついてくる。」

「ってか此処迄話してやってるのにまだ俺が只の人間だという認識なのかよ…。」

「で、一体どうするっていうんだ？」

「決まってる！…決闘だ！」

「いいだろう！…」

「ゼノヴィアは俺に対し決闘を申し込んでくる。」

「だが其処で…」

「神薙戯先輩、ちよつと待ってくれませんか？」

「木場？…」

「何故か其処で木場が待ったを掛けてきた。」

「僕にも教会の戦士と手合わせてもらいたい」

「何？」

「ふふふ…！」



木場は何時もと何処か違う様子でそう言ったかと思うと不気味に笑う。

「グレモリー眷属の一人が私らと戦うだど？」

「僕はね…君達の失敗例として一度処分された身なんだよ…」

「何？」

「ほう…」

「!?」

失敗例だど？…木場の言葉に俺は疑問を感じ、紫藤の方は大分驚いた表情をしていて、ゼノヴィアは心当たりがある様子であった。

## EPXI 「遺物使いと奪われし者達の想いPARTII」

Side蒼真

「そんなものかお前の實力は」

「くっ!?!…」

「…」

俺とゼノヴィア達の話に割り込み教会組二人に決闘を挑んだ木場だったが心の焦りからか戦い方が粗雑でボロ負けしたのだった。

そして俺達は木場の忌むべきともいうべき過去をグレモリー先輩から聞いた。

「聖剣計画」ねえ…どんな所にも外道は居るものだな…しかし非人道的な実験を行った輩をきっちり裁かずには只の追放処分って…教会上層部もアホだとしか言いようがないがソイツが今も生きてるとしたら百パー逆恨みを募らせてるだろ…。

「さあ今度は貴様を断罪してくれろ!」

「断罪されるいわれなんかないわい!」

クオルタの相手は俺がするから兵藤は紫藤さんの相手をしてやれ」

「へっ?…なんで!?!」

俺の言葉に兵藤が驚く。

「いやだつてよあれ……」

「ああ！よもや幼馴染が悪魔とつるんでいたなんて……主よ！」

「ええ……」

紫藤さんはトリップしていた。

正直俺には彼女と戦う理由は皆無なので兵藤に丸投げするといわんばかりに指差す。

兵藤は困惑しながらも構える。

「いくぞー私の「破壊の聖剣」の錆にしてくれる！」

「出来るならなー！」

あのアーサー王伝説の聖剣エクスカリバーがある時に折れてしまいその欠片の一振りをゼノヴィアは振るってくるが……あれ可笑しくね？

伝説通りならそもそも折れる事の無い筈のエクスカリバーが折れててしかも元々の持ち主である湖の妖精に返却されてある筈なのに何故現世にある？

それパチモノじゃね？……まあいつか！俺は水鉄扇を振るいゼノヴィアの猛攻を防ぐ。

「何！……」

「そらズブ濡れだ！」

突撃してきたゼノヴィアは俺が発生させた水壁に物の見事に突っ込み全身ズブ濡れ

になる。

「おのれ！なんだそれは!？」

「言うとも思おうか？」

神器ではないという事は言っておく。

それとコイツは俺の扱う物の中で最低ランクの物なんだがね」

「んなつ!?!…」

「舐めてるとでも？そんなパチモノ剣で挑むんなら百年早いってね!」

「何!？」

「だからそれパチモノだって」

驚くゼノヴィアに俺は真実を教えてやる。

「あ、やっぱり？私も可笑しいなとは思ってたんだけどねー…」

一方、兵藤のスケベ心の隙を突いて勝利した紫藤さんがそう言う。

兵藤は次の訓練倍な。

「oh…」

「さてと決めさせて貰うぜ!」

俺は水嵐を発動しゼノヴィアを追い込む。

「がぼぼ!?!…わ、わらしの負けだ!止めてくれ!…」

ゼノヴィアが敗北を認めた事で俺は止めた。

「げほげほ…お、お前は一体何者なんだ!？」

「俺か？俺は世界遺物協会日本支部からこの街に派遣されてきた只のしがないブレイカーさ。」

そして「

「ソウマ、ちよつと疲れた…」

「!？」

俺の指示で今迄ハイドしていたトワナが姿を現すとゼノヴィア達は驚く。

「スマンスマン！今度の休みにどっか連れてつてやるから、な？」

「うん！…」

「その少女は一体？…」

「秘密。そこまで答えてやる義理はないんでね」

俺がトワナのご機嫌取りをしているとゼノヴィアが聞いてくるがそこまで言う義理はないと彼女の要求を跳ね除ける。

「それと木場、ちよつと良いか？」

「なんですか？…」

「お前はかつての仲間達の想いを思い出せ…物に八つ当たりするような余裕があるなら

「な  
…」

俺は未だ項垂れる木場にそう告げて部室を後にしたのだった。

# EPXII「遺物使いと皇女の怒りと祈り、街の崩壊を防げ ！PARTI」

Sid e 蒼真

「それで一体どうする気なのソウマ？」

「とりあえず、その盗んだパチモノエクスカリバーを使わせてるはぐれ神父が居る筈だからソイツを引きずり出してブチのめす。」

一方のあつちはレベルV以上のブレイカーじゃなきや真面に力を引き出す事も出来んしな…コカビエルは持て余している筈だ…あの人もどうか奴の居所が分かったら動く事は確実だからな」

「そうね、あのお姉様が見逃す筈無いものね」

俺は事を起こそうとしている墮天使幹部コカビエルの企みを阻止するべく動き出す事にした。

「兵藤、紫藤さんに連絡取れるか？」

「あ…すんませんあのゴタゴタであいつの新しい連絡先知らなくて…」

「…そこらのホテルをしらみつぶしに探すか」

兵藤が未だ連絡先を知らないというからまずは紫藤さん達を探す事となったのだが……。

「は？」

「どうか我らにお恵みをー」

ホテル宿泊しているだろうと思っていた紫藤さん達は何故かショッピング街の中で物乞いをしていた。

事情を聞いたら紫藤さんが明らかな詐欺に騙されて偽物絵画に資金をほとんど注ぎ込んでしまったからとか……おいおい。

それでファミレスで彼女達に奢ろうと入店したら其処で搭城と何故か彼女に顔を引っ張られる形でいる知らない男子生徒が居た。

「おろ？」

「ソウマ先輩……それと聖剣使いも丁度良い所に！」

「イツセー先輩は？」

「今日は連れて来てないんだ」

「そうですか」

「こ、子猫ちゃんいきなり連れてきて何だ……」

「それより裕斗さんが行方不明になりました……」



「子猫ちゃあーん!」

男子生徒を無視し搭城がそう言ってくる。

「何?! 真逆あいつ! …」

「その真逆ですよ! …」

あのアホ、俺の言った事を理解せずに一人で突っ走る気か…。

「嫌だあ〜! あんなクソイケメン野郎の事なんか知った事か! …」

グレモリー眷属の問題は同じグレモリー眷属で解決してくれよ! …」

若干私怨が混じった悲痛な声を上げる男子生徒…つてん?

「そいつも悪魔か?」

「ええ、そうです。彼は部長の幼馴染であるシトリー会長の眷属です。

今回の件に協力を取り付けました」

「俺は了承してない! …」

ああ、シトリーときたか。

他にも悪魔居たのね。

「つて子猫ちゃん、話に聞いていた聖剣使いが居るのは分かるがなんで只の人間も一緒に居るんだ?」

搭城に強引に連れてこられたであろう男子生徒は紫藤さん達のパチモノ聖剣を見て

視線を逸らし、今度は此方を見てくる。

「ソウマ先輩は只の人間じゃありません。」

遺物と呼ばれる神器とは違った物を扱うブレイカーと呼ばれる人らしいです。

それに今回の件に先輩のお知り合いも巻き込まれたらしくて…」

「ブレイカー? つてそうま?!? もしかして神薙戯先輩つすか!?!」

「そうだが?」

「生徒会が抑え切れない変態三人組の粛清をしてくれてるそうで…本来なら此方の仕事なのに…あ、俺は二年の生徒会書記の匙 元二郎つす」

「他の二人は粛清しようがないがな」

匙と名乗った彼の言葉に俺は苦笑いする。

うん、兵藤は兎も角残りのあの二人は今後も変わらないと思うな。

で…

「うおー! 木場あ…いけ好かない野郎だと思っていたがそんな悲惨な過去があつたとは…俺も協力させてもらうぜ!」

搭城から木場の過去話を聞いた匙は協力を申し出てきた。

「それじゃあ、今夜決行といこうか」

俺達ははぐれ神父撃退作戦を決行する事になった。

深夜…

「既に誰か戦ってる！…」

おびき寄せるまでもなく既に見回りしていた公園内で戦闘が行われていた。

戦っていたのは行方知らずとなっていた木場と廃教会の時のフリードとかいったイカレ神父だった。

あの土壇場で一人逃げ延びてたのか！

木場はやはり焦りが増しているせいかどンドンフリードに追い詰められていった。

「木場！」

「！」

「ホワッツ!?」

俺は水嵐を彼等の間に発生させて割り込んだ。

「あん時のガキ…：それに…」

「フリード・セルゼン！堕ちた天才か…：奪った聖剣を返せ！

主に代わって断罪してくれる！」

「ワオ！残りの聖剣ちゃん…：だけどあのガキが居るとなあ…：ここは…」

一方、ゼノヴィアの聖剣を見て歓喜の声を上げるが俺の姿を目にすると逃げようとし

ていた。

其処に

「逃がすか!」

「んなあつ!」

匙が兵藤の物と似た黒い腕を出して其処から舌の様なものを射出させ、イカレ神父の持っていた聖剣に巻き付かせて逃走を妨害した。

アレももしやドラゴン関係か?

「よっしゃー!今一度ふんじばってやるぜー!」

「く、クソ!?斬れねえ!?!」

逃走を妨害された事で今度は身動きそのものを封じられたフリード。

「木場、俺は言ったよな?」

物に八つ当たりしているようなら果たしたい事も果たせないぞと」

「…」

俺は木場を見やる。

彼は黙ったまま動かない。

其処に

「フリードいつまで遊んでおる?」

見るからに怪しいオツサンが現れる。

「バルパーのおっちゃん！」

いやね、この可笑しな舌みてえなものが全然斬れない上にこの通り身動き封じられちまってるですね…」

「バルパーだど!?!」

一方、ゼノヴィア達はフリードが呼んだおっさんの名に驚く。

奴が本来の木場の仇か。

「教会の犬共に悪魔共とそれに通ずる人間か…仕方無いやれ!」

「しまった!?!…」

バルパーが指示を出すと何処からともなく墮天使が現れ、光の槍を投擲しフリードにかけられていた拘束を解いてしまう。

「フリード! 聖剣に因子を込めろ! それで斬れる筈だ。」

切れたら撤退し最終段階に入るぞ」

「イエッサー!」

バルパーの言葉通りフリードがパチモノ聖剣を輝かせて斬られる。

「待て、バルパー・ガリレイ!」

「今度は一体何を企んでいる!?!」

「知りたければ悪魔共の学び舎に来るといい……」

「待て! 急いで追うぞイリナ!」

「え、ええ!……」

バルパー達はゼノヴィアの問いにそうとしか答えず撤退していった。

その後をゼノヴィア達は追っていく。

俺は奴の言葉を聞いてはつとなり叫ぶ。

「塔城! グレモリー先輩達に連絡を入れるろ!」

「奴等は駒王学園を中心に事を起こす気だ!」

「は、はい!……」

俺は塔城に指示をして、仇を目にして未だ戦意を喪失していない木場を回収し、兵藤達に連絡を入れるのだった。

その頃、Side?

「そうですか……其処にその者達が……(あの方を傷付け、挙句託していた私達の大事な物を奪った不敬な輩達……到底許す訳にはまいりませんわ!)」

駒王町の本来ならばゼノヴィア達が宿泊予定であったホテルの一室にて仲間からの連絡を受け動き出す一人の女性の影があった。

# EPXⅢ「遺物使いと皇女の怒り、街の崩壊を防げ！PARTⅡ」

Sidie 蒼真

「コカビエル一味、これ以上の狼藉は許さないわよ！」

「フハハハハ！来たかグレモリーにシトリー眷属共、そして天界の犬共！む？なんだ神器も宿さぬ脆弱な人間まで居るとはな…そっちの餓鬼は現代の赤龍帝の様だがな」

「…」

高笑いしながら学園の校庭を不法占拠したコカビエルは完全に俺や気配を偽装しているレンカ達を見下していた。

あ、コイツロクに下調べもせずこんな事態引き起こしたのか…まあロクに扱えないアレをついでだからという理由で奪って知らぬとはいえあの人の怒りを買うような事仕出かしたアホだしなあ。

「コカビエルの旦那、そのクソガキを舐めない方がいいでっせ！ソイツ妙な技ばかり使いやがるんでね！」

コカビエル一味の中で唯一俺達と交戦した経験の有るイカレ神父がコカビエルに忠

告する。

「何? お前程の男にそこまで言わせるとはな…ならばメインディッシュの前に肩慣らしさせてもらおうとしようか人間!」

イカレ神父の忠告を受けたコカビエルは妙にやる気を出して此方へ突撃してきた。

「水嵐!」

「む!」

俺はすかさず水鉄扇を振るって突っ込んできたコカビエルを妨害する。

「この程度の小細工など…:むうん!」

「流石はコカビエルの旦那!」

だが流石は聖書に記された上級墮天使の一角といった所、奴は強引に水壁を打ち破ってきた。

【BOOST!】

「ブーストドラゴニックリボルシユート!」

其処に倍加した攻撃をコカビエルに加えようとする兵藤。

だが…

「む! 流石は現赤龍帝! 今の一撃は上級にもひけをとらないものだったぞ!

だがこの俺を倒すにはまだ未熟な様だな!」



「クツ!?…」

コカビエルは翼を翻して防御した事でほとんど無傷だった。

「コカビエル覚悟しなさい!」

其処にリアス達が一斉にコカビエルに追撃を仕掛けようとする。

「フーン! 貴様等はコイツ等と遊んでいろ!」

コカビエルが手を翳すと魔法陣が出現し其処から何十頭もの双首を持つ犬の様な生物が現れる。

「なっ!? 地獄の番犬ケルベロスをごんなに!?!」

やはりか、コカビエルが召喚したケルベロス達はリアス達を妨害しようと飛びかかっていく。

リアス達はケルベロスの対応に追われてコカビエルに近付けない。

「バルパー! 教会から奪った聖剣の統合の進行度は?」

「もうじき完了するさ!」

コカビエルが木場の友人達の仇であるイカレマッド野郎であるバルパー・ガリレイに作戦の進行度を聞くと彼はそう答える。

「バルパー・ガリレイイイ! 同士達の無念此処で晴らしてくれ!」

「グルオオ!」

「クツ!? 邪魔をするなああー!」

「おっと! オレっちの事も忘れないでねナイトくうーん?」

「フリード・セルゼン! …」

バルパーを目にした木場が魔剣で仕掛けるも未だ排除出来ないケルベロスとイカレ神父の妨害に遭い接近出来ずにいた。

しかしイカレ神父が扱っている聖剣が問題だった。

「ソウマ、アレって! …」

「ああ、間違いない! 奪われたアイス・レイジだ!」

「よりにもよってあんな屑にお姉様の大切な物が使われるなんて! …」

それに気が付いた俺はそれが奴等に奪われたランクSのロストプレシヤスであるアイス・レイジである事を確認する。

だがそれがよもやあんなイカレ野郎に扱われるとはな…レンカも憤慨している。

「だけど奴がブレイカーじゃねえ事は明白だ。」

恐らくは他の聖剣をあのマッド野郎に預けているから一時的に使っているだけに過ぎないな。

アイスレイジ本来の力が引き出せない分まだこっちに勝機はある。

だが…」

仇を前にして暴走している木場を大人しくさせないと万が一にもアイスレイジを壊されかねない。

「おいバルパーとかいったな。

テメエは何故木場の友人達を殺す必要があつた？」

俺はマッド野郎に問う。

「それはあの計画の上で最早不要と判断したからに過ぎん。

そうあの者達から抜き出したこの因子さえあればいくらでも聖剣使いを生み出す事が可能なのだからなあ！」

マッド野郎は一切悪びれる事もなく傲慢気にそう答えながら「因子」であろうモノを散り出した。

「アレって真逆!? そんな…」

「信じられん!…」

教会チームはそれに見覚えがあるのか悲痛な声を上げる。

「やはりこの儂から奪り上げた計画を続行していたか…ミカエルの事だから死人を出さないようにはしているのだろうかな」

マッド野郎はそう呟く。

「…天界の人達って戦争でもしたいのかしら？」

レンカがそう口にしたのも無理もないだろう。

死者を出したであろう忌むべきものを封印せずにそのまま続けているって事はそう捉えられても仕方無い。

「そんな!?!: たったそれだけの理由で同士達を!?!:」

仇から事のいきさつを耳にした木場が項垂れる。

「冥土の手土産としてこの因子は貴様にくれてやる。

なあに、もう量産体制に入っているからな」

「これが同士達の!?!:」

仇から不要とされた因子を受け取った木場は涙を流しながらそれを抱き締めていた。

「さあ、そうこうしている内に聖剣の統合が完了したぞ!」

「よくやったぞバルパー! これがこの街は後三十分足らずで崩壊の一途を辿る事になるだろう!」

「何ですって!?!」

「うわ?!」

どうやら聖剣の統合を終えてしまったようで校庭に描かれていた魔法陣が輝き出す。

教会から奪った聖剣が一つに束られるとどうやらそのエネルギーの余波が街全体へと影響を及ぼすようになっていようだ。

このままだと本当にコカビエルの言う通りに街が崩壊しかねない。

「フリードよ受け取れ！」

「お!?最強の聖剣ちゃん会いたかったぜえい！」

これでオレたちは完全無欠な最強だあー！」

マッド野郎から統合された聖剣を受け取ったイカレ神父が意気揚々とアイスレイジと共にその刃を振るおうとしていた。

其処に…ヒュツヒュン！　ボスン！

「ホワツツ!?!」

「わ、儂の術式が!?!…」

「何だと!?!」

「ゆ、雪だるま!?!」

イカレ神父の握っていたアイスレイジが何処からともなく飛来してきた氷の弾丸によつて弾き飛ばされて地面に突き刺さる。

そしてマッド野郎が仕掛けていた魔法陣目掛けて突如上空から出現した雪だるまが魔法陣に乗つかると破裂し同時に魔法陣を破壊したのだ。

それに三者とグレモリー達は驚く。

これは!?!どうやらかなり絶妙なタイミングで間に合ったようだ。

「何者だ!？」

コカビエルが見上げた先には美しい水色ロングの女性が校舎の屋上のフェンスに佇んでいた。

E P X IV 「遺物使いと皇女の怒り、街の崩壊を防げ！ P A  
R T III」

S i d e 蒼真

「何者だ!？」

「…」

コカビエルが突如姿を現した女性に叫ぶと彼女は無言のまま飛び降りたかと思うと白い翼を広げながら地上へと降りてきた。

「なん!?!…」

それを見た他の者達は驚く。

「御機嫌麗しゆう、堕ちた天使とそれに通ずる者、そして悪魔の皆様方…私はマルガリーテ、白き気高き龍の一族ホワイトドラゴンの皇女ですわ。以後お見知りおきを」  
女性はそう名乗りながらお辞儀をする。

「ほ、ホワイトドラゴン!?!…」

「白き龍の一族だ?!?!アザゼルお抱えの「白龍皇」以外にそんな奴がいるなど聞いていないぞー!」

コカビエル達は女性の正体に驚く。

「堕ちた天使コカビエル、並びにそれに通ずる者達よ、あの方の無念と私達一族の怒りを此処で晴らさせて頂きます!」

「そういう事か貴様あの時の神父の!...よくも俺の計画の邪魔をお!」

そう叫びながらコカビエルはマルガに攻撃を加えようとする。

「甘く見られたものですね」

「何!...」

マルガが手を翳すとコカビエルが光の槍を握っていた右手を凍らせた。

「ふ、フリードオー!」

「あいあいさあー!ドラゴンのお姫サマちゃんだか何だか知らないけど俺様の最強になつた聖剣ちちゃんの前に勝てるかなあ?」

コカビエルの指示を受けたイカレ神父が統合パチモノエクスカリバーを構えてマルガを斬ろうと迫る。

「テメエの相手は此方だ!」

「チイツ!?!また邪魔をするかこんのクソガキ!」

俺が水嵐を発生させて防ぐ。

「おいいつまでそうしているつもりだ木場?」



俺は未だバルパーから渡された因子を握り絞めて涙している木場に叫んだ。

「蒼真先輩…漸く分かりましたよ…同士達が復讐なんか望んでなんかなかったと！…だから僕は第2、第3の被害者を生み出させない為にバルパー・ガリレイ達を討つ！」

『♪〜』

「これは…」

「聖歌だわ…とても暖かい…」

木場がそう決意すると彼の同士達の念の様な声が微かに聞こえ、聖歌が紡がれる。

「バランスブレイク！「聖魔剣」！その身に刻むといい！」

木場は今迄扱っていた魔剣とは一際違う白と黒が入り混じった剣を発現させ高らかに掲げた。

「そんな馬鹿な!? 本来反発し合い交わる事など無い筈の聖と魔の力が交わり合わさった剣だと!?!」

木場の剣を目にしたイカレマッド野郎が叫ぶ。

「おいおいイカレマッドのおっさんよおアレくらいで驚いてもらっちゃ困るぜ? 俺は…」

「そうだな私もとっておきの物を出すとしよう。デユランダール！」

俺の言葉をゼノヴィアが遮り大剣を出してくる。

あれが隠し玉か。

「ちよつと遮られたけど俺も本気を出させてもらうぜ。」

姫さん、アレ使わせてもらって良いよな?」

「分かっていきます、一時貴方に託しましょう!」

「そうこなくつちや!」

俺は姫さんに許可を取り弾き飛ばされていたアイスレイジを拾い上げ握る。

「コイツの真価とくと味わいな!そらあ!」

「ギャ!?!……!」

ブレイカーである俺が手にした事でアイスレイジは強力無比な冷気を纏い、それを未だうざったく襲ってきていたケルベロスの軍勢に振るうと氷漬けにした。

「何だ?!?!…あの剣にあれ程迄の力が?!?!」

「馬鹿な!?!デュランダル使いといいその水色の聖剣といい真なる聖剣使いが二人も居たというのか?!」

「んな超展開有イ!?!」

「ああ、私はイリナと違って数少ない天然さ」

その圧倒的なまで見せつけてやったアイスレイジのパワーにコカビエル達は驚愕し、ゼノヴィアは淡々と答える。

「はあ…」

「一体何が可笑しい!?!」

一方呆れた顔を見せた俺に対しイカレマッド野郎が叫ぶ。

「この剣アイス・レイジっていう其処に居るマルガ姫さん達の秘宝なんだけどさ。」

選ばれた者にしか真価を發揮出来ない代物なんだよね。だが俺の力はそれだけじゃ

ない!」

「何!?!…」

「それより良いのか?」

「はっ!?!…」

「バルパー覚悟!」

「アーメン!」

「ぎゃああああ!?!」

「ひぎゃぶ!?!」

「あーらま…」

話し込んでいる間にイカレマッド野郎の背後に木場とゼノヴィアが迫っておりその刃を振り下ろした。

ついでにイカレ神父も巻き込まれていた。

これで木場の友人も浮かべられることだろう。

「さあてとコカビエルさんよここでアンタの下らない企みは終わりだ!」

「グツ!? : 脆弱な人間なんかはこの俺が立てた戦争再開の計画を邪魔されるとは : 貴様は一体何者なのだあ!？」

残る頭のコカビエルに俺がそう言い放つと奴はこの場で奴にとって最大の疑問を口にした。

推奨戦闘BGM「インモラリスト〜オーケストラVer.」

「良いだろう! 改めて自己紹介しようか : 俺は神薙 蒼真17歳普通の高校生 : ではなくソサエティ所属フリーの世界最高のLEVELXのブレイカーであり、二人のパールドラゴンと絆を結んだ男だ! いくぞ、レンカ、トワナ!」

「ええ! お姉様の前ですもの! 気合入れていくわよソウマ!」

「うん! : : :」

そう高らかに名乗った俺はレンカ達を傍に寄せ、結んだ絆の力を解放した。

「【ツインエンゲージ】!!!」

二人とのエンゲージを発動した事でアイスレイジに双つの紫炎の焰が纏わり更なる力を解放する。

「馬鹿な! 我等が存在を知らぬドラゴンがまだこの場に存在していたというのか!？」

「そういう事だ。あ、ちなみにテメエが赤龍帝と呼んでいた俺の後輩の隣に居る子もドラゴンな生まれて数週ちよつとだが…」

「何だと!?!…」

「ああ、もういい加減にうるさいっての!」

「なつ!?!…お、俺の翼があー!?!」

俺が暴露するとコカビエルはあり得ないとばかりに混乱していた。

それをうざったく感じたレンカが紫焰弾を奴に撃ち込み翼を藻掻いた。

「さあ閉幕と行こうか…」【氷結の双紫焰斬へアイシング・ツインウィルオスプスラッシュュン!!】

「がっ!?!…な、なんだこれは!?!…き、貴様等!…!…!…」

「永劫の紫焰に焼かれ続ける…!」

俺の繰り出した技の直撃を受けたコカビエルは切り口から氷の柱が生え出し、いき最後には完全に全身が氷漬けになって紫炎の焰に焼かれ続ける様な絶叫が響くだけだった。

その際にコカビエルがどうやら聖書の神の死を言っていたようで後ろで教会チームとアジアが項垂れていた。

「神だとかは関係無い。人との繋がりを大切にして生きてればいいのだから!」

「蒼真さん……」

俺はそう言つて場を和ませた。

そうこうしているとき

「ほう、真逆此方の一幹部であるコカビエルを神器使いではない人間が倒すとはな……  
しかも人の姿をしたドラゴンか……」

「!?」

「もしかしてコカビエルが言っていた白龍皇か?」

「その通りだ」

突如銀白の龍の鎧を纏つた青年が現れる。

俺は彼の正体に当たりをつけ告げると彼も頷いた。

「今回の件については全てコカビエル達の独断でしかなく「神の子を見張る者」の総意では一切無い事を告げよう。それと其処で気絶している神父らは此方で断罪するとの事で連れ帰らせてもらう」

「そういう事なのね……」

白龍皇と名乗つた青年がそう告げるとグレモリー達は納得したかのような頷きを見せる。

「では、宿命のライバル、並びに龍契約者の人間君とは是非手合わせ願いたいな」

「ええ…」

「こっちはアンタと戦う理由は無いんだがな…」

「手厳しいな、それじゃあ再び」

白龍皇の青年の言い残してきた言葉に兵藤は困惑し、俺は奴の事を思い出して頭を抱えた。

事件後、姫さんは俺からアイスレイジを受け取り再び託す為にアメリカへと旅立っていった。

余談だが聖書の神の死によってゼノヴィアがグレモリー眷属入りをしていたのには驚き二割と教会側への不信八割増しな出来事もあった。

遺物使いの赤龍帝と平行校舎のフェニックス編

EPXV 「遺物使いの赤龍帝と紡がれし平行世界」 絆を  
結んでフェニックスを打倒せよ！ PART I

それは聖剣事件解決から数日後の出来事だった。

Side 一誠

「は？！…」

朝目覚めて俺は素っ頓狂な声を出した。

それは無理も無い事だった。

何故ならもう一人の俺がうなされたかの様な声を上げながら眠っていたのだから。

「ふみゅ〜…もう朝あ？…」

布団に包まって寝ていたテリカが俺の叫び声で目を覚まして周囲を見渡すと思考停止したかのように固まる。

「ぱ、パパがもう一人居るうー!？」

まあ当然の反応だろう、テリカは二人居る俺を見て叫んだ。



「と、とりあえず神薙戯先輩に連絡を『電波の届かない場所に』繋がらない？なんで!?!…」  
兎に角この異常事態を報告しようと蒼真先輩に電話をかけるが繋がらない…何度か  
け直してみても同じだった。

「あれ？こっちのパパなんか感じが違う様な…」

「え？それって…」

どうしようかと思っているとテリカが未だ眠っている方の俺を見てそんな事を言っ  
てきた。

俺はどういう事かと聞こうとすると…ヴン!

突如部屋に魔法陣が出現し其処から銀髪巨乳の美女メイドさんが現れたのだ。

「イツセー様御提案とお迎えにあがりに…何者です!?!」

現れたメイドさんは俺の名を呼んだかと思うと警戒してくる。

「あのー…俺にも何がなんなのかさっぱり分からなくてですね…」

「新車の神器の力ですか？それに光の力を有する正体不明のその少女…」

「話聞いてます?」

主にテリカに対しての警戒が凄い。

こっちの現状を説明しても聞いてくれないようだ。

『それについては俺から説明しよう。だから一旦落ち着けグレモリーのメイドよ』

「うお!？」

「ふみや!?!今のって…!」

何時の間にか俺の手が箆手になっており其処から洩い声が聞こえてきたのだ。

ってん?今グレモリーのメイドって…真逆!?

『ああ、この女はグレモリー家の専属メイドだ。改めてよろしくな相棒!』

「あ、ああ…!」

「その声、赤龍帝の箆手に眠るドラゴン、ドライグですね。」

どういう事なのか御説明頂けますか?」

目の前のメイドさんがリアス先輩の家の者だと聞いて俺は驚く。

そしてメイドさんは俺の箆手から聞こえた声に一旦警戒心を解き耳を傾けてきた。

『ああ、まずはお前さんが今話している相棒はこの世界の相棒じゃない』

「へ?」

「!成程そういう事ですか」

箆手から聞こえるドライグの言葉にメイドさんは何かに気が付き俺は呆ける。

『つまりは未だ眠っているあっちの相棒こそがこの世界本来の相棒だつて事だ。

俺達は恐らく未だ目覚めないあっちの相棒の穴埋めとしてこの世界に飛ばされたの

かもしれん』

ドライグの言葉を聞いて俺達は驚く。

「だからあつちのパパからは悪魔さんの気配が混じってたんだ！」

テリカが思い出したかのようにそう言った。

「じゃああつちの俺はリアス先輩の眷属転生悪魔になった俺って事!？」

『ああ、そうだ。此処は相棒の知る世界ではなくいわゆる平行世界って奴だ。だからあの男に未だに連絡がつかないのは合点がいく』

「そんな!?!…」

「ねえへーこー世界って何?」

「平行世界というのはあらゆる可能性が散りばめられた隣り合わせになっている世界の事です」

「じゃあ、例えばテリカのパパがパパじゃなくて別のパパになっている世界があるかもしれないって事?」

『ああ、そういう事だ小娘』

「小娘じゃなくてテリカだよおじちゃん!」

『お、おじちゃん?!…』

ドライグの言葉を聞いて驚く俺、疑問を感じたテリカに淡々と答えるが彼女におじさん呼ばわりされて軽くショックを受けているようだ。

『と、兎に角あつちの相棒の穴埋めとして呼ばれたとしたなら問題を解決すれば元の世界に戻る筈だ。グレモリーのメイド、悪いがこつちの相棒に話をしてくれるか?』  
「そういう事なのでしたら仕方ありませんね…では平行世界のイツセー様、どうかお嬢様をお救い下さい!」

ドライグの言葉を聞いて事の顛末をメイドさんは語り出すのだった。

EPXVI「遺物使いの赤龍帝と紡がれし平行世界、絆を結んでフェニックスを打倒せよ！PARTⅡ」

S i d e 一 誠

「此処が冥界…」

「お空真つ暗—」

突然俺とテリカは平行世界に連れてこられたかと思うとこの世界ではリアス先輩の眷属となつている俺がとある悪魔に挑まれたレーティングゲームなるバトルで敗北し未だに目覚めなく、グレモリー家の専属メイドだというグレイフィアさんに事の顛末を聞いた俺達は代わりに冥界のグレモリー領にへと赴き行われる先輩の結婚式パーティーに乱入する事になったのだ。

「止まれ貴様等！—」

グレイフィアさんに渡されていた地図を見て進んで行っていくととてつもなくデカイ城にへと辿り着いた。

其処で門番兵らしき悪魔に呼び止められる。

「催しの招待状なら貰っている。ほらコレ、通してくれないか？」

「何だど？…これは…」

俺がグレイフィアさんから託された招待状を門番に見せる。  
だが

「これは偽物だ！おのれ！弱小転生悪魔如きが魔王の印を偽造するとは！」

「はあ…」

門番兵達は本物であるにも関わらずにあるうことか俺を一瞥してから頭ごなしに偽物だと決めつけてきて攻撃してくる。

「パパ！えいつ！」

「あぎや!?…」

テリカが電撃を浴びせて門番兵達をノックアウトさせる。

「たのもー！兵藤一誠只今参上！」

本当なら普通に入るつもりだったのだが騒ぎを起こさせられたので豪快に道場破りで宣言した。

「一体何事だ!?き、貴様はリアスのポーンの小僧！俺のパーティーの邪魔をしに来たのか?!」

「おうよ！」

「ええい！つまみだ…」

「それは困るかな」

見るからにホスト風のチャラ男でリアス先輩の婚約者だというライザー・フェニックスが俺を目にして叫ぼうとしたがふと響いてきた声に遮られる。

「さ、サーゼクス様!?! どういう事です?」

「彼を此処まで招待したのはこの私だからね」

「なっ!?! …つまりはレーティングゲームの結果に納得いかない?」

「いやいやあくまでパーティーの余興さ」

サーゼクスと呼ばれた赤毛の男性にライザーや他の周囲の悪魔は平伏するしかない。

成程彼がリアス先輩の兄貴か。

「魔王サーゼクス様ですね。先程招待状を見せたら偽物だと疑われて門前払いされたのですが」

「すまなかつた。末端まで連絡が行き渡っていなかったようだね…」

俺が今さっきの件を魔王様に問うと彼はバツが悪そうに謝罪してきた。

「その贖罪の代わりと云ってはなんだがリアスのポーン君、君は一体何を望む?」

「魔王様!?! 何故こんな餓鬼に…」

「黙りなさい! 彼には此方の不手際で迷惑をかけてしまったんだ。それとも私の顔に泥を塗るおつもりかね?」

「ぐうつ?!…」

魔王様の発言に驚いた他の悪魔が口々に言ってくるが彼が一喝して黙らせた。

「では、俺達がああの焼鳥野郎に勝つたらリアス先輩を自由にさせてあげて下さい!」

「了承した!」

俺はサーゼクスさんに提言し、壇上に登ってそう宣言した。

「では、ゲームの開始といこうか!グレモリー、フェニックス眷属は…」

「あ、俺とこの子の二人で挑みますので大丈夫ですよ?」

「イツセー／先輩／君!」

俺の発言とテリカの姿にリアス先輩達が驚く。

無理もないだろう。

「貴様とその小娘の二人だけで俺と俺の可愛い眷属達に挑むだと?良いだろう!あの時

の様に叩きのめしてくれる!」

「そつちこそ負けた時の言い訳でも考えておくんだな!」

俺とテリカもゲームの準備に入るのだった。



EPXVII「遺物使いの赤龍帝と紡がれし平行世界、絆を繋  
げてフェニックスを打倒せよ！PARTIII」

S i d e 一 誠

「よつと！」

「あれ？ここってパパ達を通っているがっこーだ?!」

「そうみたいだな」

悪魔の技術凄いなと思いつつもこのぐらいの事なら出来るロストプレシヤスがあるのかもしれないと邪推しつつテリカと一緒にフェニックス眷属達が居る地点へと向かった。「よくものこのこやってきたわねこの変態ポーン！」

「ボコボコのバツラバツラにしてやりますう〜！」

「…」

会敵一番に三節棍を構えた茶髪の少女とチエンソーを構えた双子にそんな事を言われた。

「この世界の俺って何仕出かしたんだ!？」

「テリカは下がっててくれ俺が相手するから」

「うん、分かった!」

まだこの時点でテリカの力を見せる訳にはいかなかったので俺が彼女達を対応する事にした。

「喰らいなさい!」

三節棍の少女が思い切り振り被って俺へ向かって振り下ろしてこようとす。

【BOOST!】「ブーステッドリボルビングボウ!」

「なっ!?…きやあ!」

即座に倍加して矢を放ち少女の得物を弾き飛ばす。

少女は必死に抵抗するが虚しくその手から離れてしまう。

「こんのおっ!」

「!遅いな!」

「きゃ!」

チェンソーの二人が背後から襲いかかってくるが此方も冷静に矢を連射し又も得物を弾き飛ばす。

「今度は誰が相手なんだ?」

三人をノックアウトに追い込んだ俺は態勢を整えた。

Side グレモリー眷属

「凄い！…」

「もうライザーの眷属の三人を追い詰めてる…」

「…」

「子猫？」

一誠と彼が連れて来た謎の少女とライザーの眷属のゲームを観戦していたリアス達は予想していたものとは180度違う展開に驚いていた。

その中で子猫だけが怪訝な顔をしていたのにリアスは気が付く。

「戦い方が今迄のイツセー先輩とはまるで違う！それにこの気配って…」

「どういう事なの子猫？」

「えっと…なんて説明すれば良いのか…」

子猫が呟いた言葉にリアスは？を浮かべる。

しかし自分達が知りたいのは何よりもあの謎の少女の事である。

気が付けばゲームは既に一誠がポーン全員を倒して騎士と僧侶を相手取っている所まで進行していた。

Side 一誠

「グレモリーのポーン！この私と一騎打ちを…」

「ああ、そういうのいいからさ」

「あふん!？」

「きやあ!？」

「あ…」

騎士を倒そうと思っていたら流れ弾で僧侶まで倒していた。

「あ、貴方この短期間に何がございましたの!？」

「レイヴェル様此処はお下がりを!この男は私めが!」

「ま、任せましたわよ!…ユーベルーナ」

「は!」

そう言ってレイヴェルといわれた僧侶は視界外に下がっていった。

「あの僧侶の子は戦わないのか」

「?お前には説明している筈だが?あのお方は我らがキング、ライザー様の妹君でレ-

ディングゲームには勉強で参加しているにすぎないと」

「ああ…そうだったな悪いド忘れしてたわ」

あの焼鳥野郎、実の妹も眷属にしてんのかよ…。

「テリカ、いけるか？」

「うん!テリカはあの人と戦えば良いんだよね?パパ」

「ああ、そうだ」

俺はテリカにクイーンの相手を任せる事にした。

Sideテリカ

「よし、いづくよー！」

「あら？あなたみたいなのが私の相手なの？舐められたものね！」

「テリカ、ガキじゃないもん！」

「はいはい、ちよつと痛いかもしれないけど喰らいなさい！」

パパにクイーンのお姉さんの相手を任せられたあたしはお姉さんが撃ってくる魔力弾を軽くジャンプして避ける。

「へっへーん！当たらないよ」

「クツ!?すばしっこい小娘ね！これならどうかしら?!」

お姉さんは当てられない事に苛立つて私の周囲に逃がすまいと魔力を収束させてきた。

「Bomb！」

お姉さんがそう言うのと収束されていた魔力は一気に弾けた。

「おーほつほ！これで終わりね！」

「ちよつとだけビツクリした〜！」

「え?…」

勝利を確信していたお姉さんだったが未だ五体満足なあたしの姿を目にしてありえないといった表情を見せる。

「わ、私の全力ですよ！無事で済む筈が!?!」

「あれで全力なの？片手ででも防げたけど」

「は!?!」

私はドラゴン化させた右手を見せる。

ユーベルーナの全力の一撃が効かなかったのは無理もない。

そもそもがテリカに宿る光の力で半減されていたのだから。

「!?そんな馬鹿な!?!…何故小娘から光の力を感じるの!?!」

テリカがイエロードラゴンとしての外皮を出してきた事で漸くユーベルーナは彼女が自分達の天敵である光の力を持っている事に気が付き驚愕する。

「なんでってテリカ、イエロードラゴンだしね！今度はこっちの番だよ！そりゃあ!」

「なっ!?!ドラゴンですって!?!って待っ!?!」

あたしの正体に驚くクイーンさんに対し爪で連続ひっかき攻撃を繰り出した。

「がっ!?!…今残っている魔力ではとても対応出来ない…も、申し訳ありませんライザー

さまあー!」

クイーンさんはそう言いながら転送されていった。

「やったなテリカ！」

「えへへ〜！」

私がパパに報告しにいくと褒めてくれた。

「真逆、俺の眷属達を倒してくるとはな」

そこにパパが焼鳥と呼んでいたおじさんがやってきた。

Side 一誠

「後はお前だけだな焼鳥！」

「焼鳥言うな！又俺の炎で痛い目に遭いたいのか！」

「来なよ！俺を舐めるとアンタがその目に遭うぜ？」

「弱小の転生悪魔の小僧如きがあー！」

俺が軽くライザー・フェニックスを挑発すると奴は炎を放ってきた。

「ほらよつと火の用心だ！」

俺は懐から神薙戯先輩から一時的に借りさせもらっていた水鉄扇を取り出して水壁を発生させて防いだ。

「なっ!?俺の炎がその程度の水量に掻き消されただど!?…」

「その程度のチンケな炎なんじゃねえの？」

「なんだとお!?これでも喰らえええー！」

激昂したライザーは先程よりも出力を上げた炎を放ってくる。  
が

「パパに危害は加えさせないよ！」

「ナイスだテリカ！」

「なんだと!?!何故その小娘から光の力を感じる!?!:~:」

「おいおい、もしかして自分達の揺るぎない勝利に酔いしれてて戦闘見てなかったのか? :だつたらお前に見せてやるよ俺達の力をな! :テリカいこう! :」

「うん! :初めてだけどやってみせる! :」

「な、何をする気だ!?!」

ライザーを無視し俺とテリカはお互いの手に触れる。

「エンゲージ!!」

エンゲージを結んだ事でお互いの薬指には眩い輝きを放つ金色の指輪が填められて、俺にテリカの力が流れ込んだ。俺にテリカの力が流れ込んだ。

「よしライザー! :つてん? :」

「此処ドコ!?!」

ライザーに向き直ろうとして前を向くと俺達は先程迄とは違う空間に居た。

もしかして:~:そう思い少し進むと其処には巨大な赤いドラゴンが居た。



「漸くか…：今代の俺の相棒よ」

「お前が俺の神器の…」

「ああそうだ、赤龍帝ドライブ・ア・ゴツホだ。

目覚めるのにはまだ時間が必要と思っていたのだがな…」

ドライブと名乗ったドラゴンはそんな事を言ってくる。

「ドライブおじちゃん？あたしテリカだよ！同じドラゴン同士よろしくね！」

「お、おじ!?!…：今何と言った？」

「え？あたしはおじちゃんと同じドラゴンだよって」

「成程…：そういう事か…」

テリカにおじちゃん呼びされて若干のショックを受けていたドライブだったが彼女が自身と同じドラゴンである事を知ると納得したかのような顔になった。

「どうやら相棒にその小娘の力が何らかの方法で流れ込んできた事で目覚めの時期が早まったようだな。

俺の精神空間にまで来れているのも副次効果か」

「そうか、テリカとエンゲージしたから！」

ドライブの考察を聞いて俺はすぐに思い当たった。

「つて今は焼鳥とバトってた最中なんだった！早く戻らないと…！」

「そういう事ならば力を借すぞ相棒！」

「サンキューな！」

ドライグの力が解放され、テリカとのエンゲージも結んだ！

これで俺達が負ける要素は最早無いといってもいい。

『いくぞ相棒！』

「おう！禁手へバランズブレイク！へ閃光赤龍帝の鎧【シャイニングブーステッドギア・スケアメール】！ー！！

〈WelshDragonBarannceBreak!!〉

「テリカ！」

「うん！」

ドライグの力を解放させた俺はテリカの手を掴んでドライグの精神世界から現実世界へと戻った。

「馬鹿な!?!:貴様に禁手など扱える程の力は無かった筈!?!:そ、それに何故転生悪魔が光の力を纏っているのだ!?!」

「ああ、その事だったら今迄騙していて悪かったな:俺は悪魔じゃねえよ」

「は!?!」

俺の劇的なパワーアップに驚愕する焼鳥に俺は種明かしする。

すると観戦していた者達も驚く。

「ど、どういう事だ!?! 貴様はリアスのポーンの筈だ!」

「俺達実は平行世界からこっちに呼び出された存在みたいなんだわ…お前に凹られて未だ目覚めないこの世界の俺の代理という事だな。」

俺はグレモリー先輩の眷属じゃないからグレイファイアさんに頼んで気配を誤魔化してたんだ」

「そんな馬鹿な事が!?!」

「そういう事だったんですか…」

焼鳥は目の前の現実が受け入れられずに喚き、子猫ちゃんはどこか納得していた。

「だ、だが所詮は光の力がある所で人間! この俺が負けるなんて事がある筈がない!」  
「やってみるか? ただし泣き言はきかないぜ?」

尚も己の勝利が揺るがないと過信している焼鳥を尻目に俺は懐から新たなロストプレシヤスを取り出す。

力が覚醒した今の俺ならコイツを扱える!

「だったら受けてみな! このランクAのロストプレシヤス「ウィンドパイル」の力を!」  
「そんな玩具で何が出来る?! 喰らええー!」

【BOOST、BOOST!】

「へーステッドドラゴネスシャイニングウインドパイルン!! だりやああー!」

「な、何!?…この俺が人間如きに負けるだ…ぐわああー!?…」

完全に舐めきっていた焼鳥はテリカとのエンゲージで得た光の力とロストプレシャスの風の力、そしてブーステッドギアの相乗攻撃を押し返せる訳もなく直撃を受けて不死能力を使う間も無く気絶した。

「か、勝つたの?…」

「そのようですね…」

俺達の圧倒的な勝利にグレモリー先輩達は安堵し他の悪魔達は何やら喚いていた。

「ン?…」

「わあ、きらきらだ〜!」

そこで俺とテリカの体から光が溢れ出した。

「な、何!?…」

「どうやらこの世界の俺が目を覚ましたから俺達はお役目御免という事みたいだな…」

「待つ!…」

別れをいう間も無く俺達は元の世界に帰還したのだった。

## 遺物使いと三勢会談編

## EPXⅢ 「三勢＋α会談にてPARTⅠ」

Side蒼真

「何？会談に出てほしい？」

「ええ、先日のコカビエルの件についてね…」

「成程当事者だからか…」

正直面倒臭いと思っていたがもう一人の立役者であるマルガ姫さんとはとつと帰っちゃまったし丁度俺も言いたい事が多々あったのでこの学園で行われるという会談に参加する事を了承した。

くそして会談当日く

「よお、お前さん方がリアス・グレモリーが言っていたドラゴンと契約してるっていう人間達か！しかも一方はブーステッドギアを宿してもいる赤龍帝ときたもんだ。

俺は「神の子を見張る者」のリーダーのアザゼルだ」

「ああそうだ、だがその前に言うべき事がある筈だが？」

「ああ、勝手な行動をしてた部下やコカビエルの件か、巻き込んでしまつてすまなかつた

…」

「それでいい、こつちの組織もこの街について調査不足だったとはいえ一方的に襲いかけられたのだからな…あの戦争狂野郎については遅かれ早かれだったと俺も思っているから責める気はない」

「そう言ってもらえると助かる」

墮天使リーダーであるアザゼルというおっさんは俺の言い分に対して素直に謝罪を述べてきたので俺もそれ以上追及しなかった。

「私は天使長のミカエルと申します、この度は此方が…」

「いやいや天使長さんよその前に言うべき事があるんじゃないのか？」

「そ、それは…」

「未然にきちんと対策していれば防げたであろう事案が多過ぎる！

そんなんだから神に疑問を持たれてつけこまれて反抗だつてされるんだろうが！」

「そ、それは大変申し訳無く…」

俺はミカエルと名乗った天使長に遠慮無く説教をかましてやった。

「つたくこの場に姫さんがいなくて本当によかったな…戦争仕掛けられても文句言えんぞ」

「う…ぜ、善処させて頂きます…」

ミカエルは萎縮しそう言ってきたのでそこで止めといてやる。

「それでは本題に戻ろ…」

「—」

再び会談の続きを始めようとしたら周囲が違和感に襲われる。

「コレは—…」

「子猫ちゃん達の動きが!?!…」

「止められているのか!?!」

ふと見ると会議室に居た何人かの動きがまるで完全に静止しているかのように止まっていた。

「チツ!?!…もう奴等が動き出しやがったのか!?!…」

「奴等だと?」

「ああ、「禍の団」という大層なテロリスト連中だよ…恐らくグレモリーのもう一人の僧侶眷属の神器を強引に行使させていやがるな!」

「真逆ギヤスパーが敵の手に!?!」

「ああ、俺達は最上級、小僧達は強者と赤龍帝だから影響を受けてねえがこのままだと…」

どうやらグレモリー先輩のまだ会った事の無い眷属が捕まっている影響みたいだな

…。

「じゃあ、こつちに向かつてくる奴等は全員敵と見なして良いんだな？」

「ああ、厄介事に又巻き込んだが処遇はそれぞれに任せる！」

「承知した！イツセーとテリカは先輩達と共に外の敵を！俺達は捕まっている眷属を助けに向かうぞ！」

「ああ、分かったぜ！」

「うん！」

「蒼真君、ギヤスパーの事どうかよろしくお願いします…」

「ああ、任せろ！」

兵藤達に外の敵を任せて俺達はグレモリー眷属の救出に旧校舎へと向かうのだった。



EPXIV 「三勢 +  $\alpha$  会談にてPARTII」

Side蒼真

「これで周辺の敵はいないな？」

「うん、どうやらそうみたい」

禍の団とかいう学園を急襲してきたテロリスト連中は正直弱かった。

水嵐だけで無力化した後部屋の奥で怯え震えていた金髪の少年に声をかける。

何故か女物の服装だったのには流石に予想外だったが。

「お前で間違い無いな？グレモリー先輩のもう一人の眷属というのは」

「ええ、は、はい！…」

「だったらもつと別の場所に隠れているんだ。」

今この場は戦場になっているからな」

「ええ!?わ、分かりました…!」

少年を隠れ場所に誘導して俺達は外に出る。

が…

「！二人共エンゲージ!!」

「うんー!」

俺は奴の気配を察知してレンカ達の力を解放し放った。

「水閘嵐旋風撃!!」

「おわっ!」

「ほう!…」〈Divaide!〉

そんな音声が届いてくるが俺は構わず出力を上げる。

「何?!ぐはあつ!?!…」

「ヴァーリー!?!」

「やはり裏切者がいたようだな…やはり内部情報をテロリストに流したのはお前だったか白龍皇」

「ぐっ!?!アルビオンの半減をモノともしないとは想定以上か!…」

「ヴァーリーをここまで!?!…」

俺が繰り出した攻撃をモロに喰らい吹き飛ばされる白龍皇と寸での所で当たらなかったもう一人の男は驚愕していた。

「世界最高であるブレイカーを舐めるんじゃないやねえ…手酷くやられちゃったみたいだが一矢は報いたみたいだなイツセーは」

「ああ…真逆相反するアルビオンの力を取り込み己がモノにするとは恐れ入ったよ今代

の赤龍帝…それに光の力を持つドラゴン」

白龍皇の言う通りイツセーは奴の力を取り込んだようでその力の反動が大きく満身創痍の状態だった。

テリカの光の力が中和していてくれたからこそこれですんでいる。

「はは…一世二代の賭けみたいでしたけどね…成功してなんとか…」

『ああ、本当にな』

「パパ…ケガが酷いんだから大人しくしててよ！」

テリカに懸命な治療を施されながらイツセーはそう答えた。

「さて…まだ戦るか？」

「その通り…といきたい所だがこれから別の地へ向かわないとならなくてね…おいとま

させてもらおうか」

「二度と現れんではない！」

「これは手厳しいね」

そう言う白龍皇と男は何処かに去っていった。

「三勢力による会談が無事終了してから数日後のある日」

「何？妙な輩がアルジェントに対して求婚してきているだど？」

「そうなのよ…アスタロト家の御子息からの突然過ぎる申し出だった事もあってこつち

はつつばねてやったわ!

アーシア本人も断っていたし…けどその彼がアーシアが追放される切欠になった人物でもあるのよね…」

「…」

もしかしてその悪魔の仕組んだマツチポンプじゃね?

アルジェントが追放された件については色々可笑しいとは思っていたがソイツの事を調べてみた方がいいかもしれないな。